
せいていさんがんばって！

えいせん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

せいといさんがんばって！

【Nコード】

N5694Z

【作者名】

えいせん

【あらすじ】

その男、転生する。帝王の力をその身に宿し。その女、前進する。哀しみを背中に背負い。その者、渴望する。このぬくもりと、あの『愛』を。これは、格闘ゲームの素晴らしさを説くお話（嘘）。これは、『帝王』の話。

ていおう！(前書き)

何一つ考えてないこの小説を開いてくれてありがとうございます！
楽しんでもらえたらいいな！

ていおう！

くそっ！

一体どうなってやがるんだよおい！

いつものように村に『お邪魔』して食いもんを貰って・・・あわよくば女も頂こうかなんて俺達は思ってた。

なのに・・・これは一体どういうことなんだ！？

「何やってんだよお前ら！こんな奴らにてこずりやがって！」

「む、無理だよアニキ！こいつら、いつもと違う！」

村人達が俺達に抵抗してきたことなんていくらかでもある。

だけど、俺達が今まで生きてこれたのはそんな奴らを力でねじ伏せて来たからだ。

「くそ！？なんだよこいつら！？う、うわあああああつ！！！」

また一人、仲間が死んだ。

「俺達の村に入ってきやがって！死んでしまえ！」

「な、なんなんだよ！」

「純粋な強さで言えば俺達が確実に強いだろう。」

俺達は賊だ。

俺達の方が圧倒的に経験を積んでいる。

村人達の中では今まで人を殺したことすらない奴だって少なくないだろう。

なのに、俺達が押されている。

「ハアアアッ！！」
「ぐえっ」

一人、俺達の誰よりも強い女がいる。
腰まで届く紅い髪。

俺達と大差ないほどの長身で、鋭い目。
力強い印象を与えるその風貌で、俺の仲間を次々となぎ倒してい
く。

この女の槍によって俺の仲間は何人も死んでいったが、この女に
俺達が劣勢になるほどの力は無いだろう。

どれだけ強かろうが、所詮一人で出来ることには限りがある。

俺達がここまで劣勢に立たされているのは恐らく、たった一つの
こと。

・・・俺達は、村人達に恐怖を感じている。

この村の雰囲気、異質だった。

村人の一人を殺す。

そうすると、どんな村でも足が震え、逃げ出す奴が居た。

なのに・・・この村はどうだ！？

怒りに顔を歪ませて、次から次に突っ込んできた。

片腕を失くせば、もう片方の腕で。

両足を失くせば、両腕で首を締めあげて。

両腕を失くせば、その体で仲間の壁になり。

正気の沙汰じゃねえ！

足が震える？

震えているのは俺達の方だ！

俺達は人間だ。

人間ってやつは、恐怖って感情がある。

人を殺す恐怖ってやつは、俺達だって感じてる。

それを俺達は殺し続けることで、感じないように思わせているんだ。

それでも、死ぬ恐怖ってもんは誤魔化そうって思っても出来るもんじゃない。

出来たらもうそれは人間じゃない。

・・・鬼だ。

こいつらは人間なのか？

傷つくことを躊躇わず、自分が戦えないと悟ると仲間のために命を張り。

これが、ただの村人だっていうのか！？

村『人』なのか！？

あり得ない、人間の出来る事じゃない！

こいつらは、まるで・・・！

「ヒッ・・・！？」

なんだ、この女・・・

肩で揃えられた銀の髪。

さっきの女よりは小さいだろうが、すらりとした体。

その体を、漆黒の服で包む、絶世の美女と呼ぶに相応しい容姿を持った女は、防具の一つも付けずに、こっちへ歩いて来る。

見ようによつては天使が降り立ったようにも見えるかもしれないが、俺には悪魔にしか見えなかった。

殺気の一つも感じられないその女の目には、俺たちなど視界に入つてすらいなかった。

「俺達には帝王様がついているんだ！負けるはずがないんだ！」

「何？帝王だと！？」

帝王。

そうか、こいつが帝王か。

ということは、あの女は『陥陣営』か。

たった二人で賊を潰してまわっていると聞いたことはあるが・・・この村に居やがったか。

ツイてねえ・・・ツイてねえが、二人さえ潰せばこの村の奴らだって、ビビって逃げ

「ふむ。・・・貴様ら、かかってくるがいい」

目が、あった。

たったそれだけで・・・俺は、殺された。

格が、違う。

足が、手が、動かない。

凜としたその声が俺の体を侵食していく。

圧倒的な力の差を感じ、俺の体は震えるということすら放棄したようだ。

「こぬのならこちらから行くぞ！」

物凄い速さでこちらに近づいてくる姿をなんとか目で捉えるが、体は一向に動かない。

その手で道を阻む仲間を蹴散らしていく。

それを見て俺の頭は警告を全身に伝えていくが、肝心の体は反応すら返してくれない。

気がつけば、俺は血を吐いていた。

痛みすら感じずに、ただその不快感だけを認識して、急に意識が遠のいていく。

ツイてねえ。

村人が異常だったのでは無かった。

この女の、帝王の覇気が異質だったのだ。

・・・本当に、ツイてねえ。

俺は、倒れるという最後の仕事のためにようやく生き返った体に鞭を打ち、後ろを向いた。

自分を殺した相手と思えないほどに美しい『帝王』の背には、何故か哀しい漢が視えた気がした。

ていおう！(後書き)

うちの帝王はEボタンカラーです。

あなたの帝王は、何カラー？

続く・・・続くのか？

はじまり！（前書き）

次はトキか！ラオウか！

ジョインジョインジョイン

ジョイントキイ

はじまり！

転生。

もし自分が転生できると聞いた時、皆はどう思っただろうか。

夢のような世界へ行けることを喜ぶのか。

不思議な力を得ることに涙するのか。

それとも、今までの世界から消えることに悲しむのか。

俺か？

俺はもちろん、喜んだよ。

「本当に俺が転生するのか!？」

「本当だ。私が嘘をつく意味がない」

急に大きな声を出した俺を呆れた様な目で見る男。

赤と黒の派手なスーツに身を包んでいる、ということしかこれといった特徴のない男。

今の状況的に、こいつが神だと思っただが・・・影が薄いな。
服の派手さに負けてるよ。

「君のような反応をしてくれる方がやりやすい」

「そうなのか？」

「泣かれたりしたらこっちも困るんだ。時間がかかるからな」

「確かに」

「そんなことより、だ。君もわかっているだろう？なんの特典も付
けずに送れる訳がないということを」

男がそう言うと、何もない空間から漢字が沢山書かれたスロットが出て来た。

「そのスロットを回してくれ。その内容に沿った特典をあげようじゃないか」

「内容？」

「そうだな・・・例えば『頂肉体』が出たでしょう。その世界での人類最強の肉体を手に入れれる。他にもスロットの字次第では架空の技や力を手に入れることも出来る」

非常に夢が膨らむ内容だ。

「まあ、全てがスロットの字で決まるから・・・『無能力』なんてのが出ることも」

「えっ？・・・え、えっ!？」

「スロットだぞ？スロットは博打だ」

「ちよつとちよつと！特典くれるんじゃないの!？え!？」

「それはまあ、能力がないのが特典になる訳で・・・『超不幸』とかよりはマシだと思えば」

「その『超不幸』とかになつたらどーすんの?どーすんのよ!？」

「まあ、運命だと思ってくれ」

と、いうことは・・・弱くてニューゲームなんて最悪なことも起こるかもしれないのか。

・・・もとのせかいにかえりたいよ。

「まだスロットを回してないから落ち込むこともないと思うが」

「そうだよね！いいの出るよね!」

「知らん」

果てしなく不安になる気持ちを抑えて、スロットを・・・回す！
何が出るんだ？

聖？聖なる力的な？

帝？聖帝になるの？

王？聖帝王ってなに？

「良かったじゃないか。大分良い特典だぞ『聖帝王』は

「そうなの？」

「ああ、架空の能力をもらう訳だからな」

架空の能力か・・・

聖帝で帝王・・・

ん？んん！？

「もしかして・・・」

「そうだ。あの聖帝だ。・・・格闘ゲーム仕様だがな」

それってどうなの？

喜ぶべきなのか悲しむべきなのか・・・

「微妙な顔をするな。あのゲームのバランスがおかしいだけだ。十分強力だよ」

なら強いのか。

良かったークソみたいな特典じゃなくて！

いやまあ、病人の方がいいなーとかちよつと思ったりもしたよ。でも、十分強いらしいしもう満足だね。

うん。

良かったークソみたいな特典じゃなくて！！

「良かったークソみたいな特典じゃなくて！！」

「運が良かったじゃないか」

やっぱり声に出して言うべきだね！

「世界は・・・恋姫の世界に行ってもらおう」

おお！

チート特典で大暴れしてモテモテ生活！

なんてことも・・・いいじゃないか！

「容姿の設定も聞くが・・・望みはあるか？」

「そこはやっぱり・・・10人中9人が振り向くようなレベルの容姿が欲しいなと」

「わかった。そうしようじゃないか。」

キテる。

キテるよ！

俺の時代キテるよ！！
モテモテ生活確定ですね！！

「お前のニヤついた顔を見てると何を考えているか手に取るようにわかるな。まあ、逝ってこい」
「逝ってきますー！！」

お父さん、お母さん。
幸せになっってきますー！

世界から、一人、飛び立った。

前が見えない。

目を開けてないから見える訳がないんだけどね。

「あなた、これが私達の子ですよ」
「おお！お前に似てとても可愛い子だー！」

「もう、恥ずかしいことを言わないで下さいよ！」

「本当のことを言つて何が悪いというんだ」

「これが俺の孫、か・・・」

「そうですねよお父さん。抱いてみます？」

「う、うむ・・・悪くないな・・・」

目を開けると、長身の男が俺を抱きかかえていた。

「齢50といったところか、洪さの漂うその風貌はさながら敏腕スナイパーのよう。」

しかし、その目を真つ赤に腫らしてくしゃくしゃになったその顔は、孫の誕生を喜ぶ爺そのものだった。

「そうか、孫か・・・こんなに早く見れるなんてな・・・」

「お、お父さん！？どうしたの!？」

「いや・・・ちよつと目にゴミが入っただけだ。大丈夫だよ」

「そう・・・お父さん、ありがとうね」

「お前は・・・俺を泣かせたいのか？」

目から涙を溢れさせた俺の爺さんのその横で、俺の親が仲良く笑つて見つめていた。

その笑顔を見ていると、前の親を思い出してしまふ。

碌な親孝行もせず、半ば家出のように一人暮らしを始めた。

最後に見た両親の顔は、寂しそうに笑っていた。

俺は才能という奴に恵まれていなかったが、それでも俺の頑張りを評価してくれた。

俺が生まれたとき、今の親のように笑っていたのだろうか。

俺が居ないと知つて、どうするんだらうか。

そんなことを思うと、何かこみ上げてくるものが。

気がついたら、俺は大声で泣いていた。

「お、おい！？いったいどうすればいいのだ！？」

「お父さん、落ち着いて」

お父さん、お母さん。

『父さん、母さん』。

ここで幸せになります。

はじまり！（後書き）

主人公と両親の名前、どうしたらいいのか・・・
帝王さんには哀しみを背負ってもらわないといけないし・・・

続け！

せいちょうじー！（前書き）

短い・・・

すごい文才おくれー！

せいちょう！

日記を、書こうと思う。

3歳になり、文字も少しずつだが理解できるようになってきた。でも、時々日本の文字が恋しくなってくる。

何故かこの世界は日本語で成り立っているけど、字は漢字ばかりで正直よくわからない。

だから、日本語で書く。

日本語で書けば見られても理解出来ないだろうし。

3歳になったけど、相変わらず平和だ。

この世界が三国志をモチーフにした世界だと忘れそうぐらいに。

そういえば三国志や恋姫、あと21世紀の科学、兵法の情報とかは記憶からごっそり抜け落ちてたけど未だに記憶が戻らない。

女がとても強い世界ってことぐらいしか覚えてないけど、神様が改変を恐れて何かしたんだろうか？

体が女だったのもびっくりしたけど、女が強い世界なら結果オーライかもしれない。

体も少しずつ、だがしつかりと成長してきている。

と言っても、3歳だから絶世の美女な訳がないけど。

容姿を良くしてもらったのはハーレムを作りたかったからであつて、男にモテたいからじゃない。

大人になったら、男からの視線も増えるのだろうか。

・・・想像したくない。

どうせなら精神も女にしてくれば楽だったのに。

神様にもらった転生特典だけど、全くもって使えない。

聖帝の力を貰ったけど、それは経験や技術であって、体を鍛えな
いと十全に発揮しないものだった。

一度、鍛えようと外に出てボロボロになって帰って来た時は両親
に泣きつかれたので、もう少し成長するまでは自重しようと思う。

3歳の体で文字を書くのがここまで重労働とは思わなかった。

8歳になった。

中々に成長したと思う。

両親も喜んでくれた。

胸は無だけど・・・8歳だから別に大丈夫なはずだ。

流石に8年間もこの体で生きていると、愛着が湧いてくる。

しっかりと美しい幼女になったんじゃないだろうか。

最近、男の子からの視線をよく感じる。

稀に大人の視線も交じっていて少し・・・いや、かなり気色悪い。
男には絶対にやらん。

・・・綺麗なお姉さんなら話は別だけど。

6歳から体を鍛え始めたけど、少しずつだけど効果が出てる・・・と思う。

何故か見た目に表れにくいので、よくわからないが、ムキムキの8歳幼女になるのも何とも言えないから、善しとしよ

う。
しかし・・・男口調なのと俺と言つのをやめると一々両親がうるさいのはなんとかならないのか。

まあ、自分の娘が男口調だったら少々アレだし、現実で俺と言つ女は少しイタイような気もしなくはない。

でも、口調を変えると何か自分とは違う気がしてどうも落ち着かない。
ない。

特に父がうるさくて・・・そろそろ諦めて欲しい。

俺も、もう15になる。

絶世の美女にかなり近づいたんじゃないだろうか。

背もかなり伸びたし、何よりも男から言い寄られることが日常茶飯事になったことが、大分魅力がでてきた証拠だと思う。

男に恋愛感情を抱かないのは相変わらずだけど。

最近、帝王の力に体が追いついてきた。
かなり嬉しい。

でも、まだ体に負担が掛かるようで、全力を出せるようになるの

はまだ先のようだ。

頑張れ、俺。

そろそろ口調のことは諦めてくれてもいいんじゃないだろうか。

せいちょう！（後書き）

オリキャラ、高順さんしか考えてないんですよー
出してほしいキャラとか、教えてもらえないかな？（チラッ

はじめて！（前書き）

私の中二パワーを解放しても、この程度だということか・・・
相変わらず文字数が・・・

はじめて！

きょう、はじめてひとをころした。

怖い。

だけど、それ以上に心地良い。

冷静になったとき、殺人の記憶に苛まれて動けなくなるのかと思っただけ、むしろ、村を守るために殺したことを感謝されたことで、気分が高まって落ち着かない。

正直、殺しているときは恐怖も躊躇いも何も無かった。

そんなもの、感じる訳がなかった。

村を守るために人を殺す。

今まで人を殺したことのない俺がそう出来たことを、勇氣ある行動だと両親に褒められた。

確かにそれは周りから感謝されるに値するものだったのかもしれない。

でも俺は、そんな格好いいことをしたと言える自信はなかった。

何故なら、俺は笑っているから。

「賊だー！賊が来たぞー！」

「なんだってー！」

突然この村を賊が襲ってきたと聞いたとき、俺は真っ先に出て行

った。

素手で戦えるのが俺だけで、特に準備するものもなかったから一足先に賊を見に行ってみた。

むさい。

この賊を表す言葉はそれだけで十分、そう思えるほどに息苦しい雰囲気だった。

「アニキ、この村はどんな女が居ますかねえ！」

「お前の頭ン中はそれしかねえのかよ・・・まあ、イイ女がいた方がキモチイイけどな！」

「アニキ、美味しいもん一杯食えるかなあ・・・最近、碌な食いもん食ってねえよ・・・」

「メシも女も手に入れて、さっさと帰るぞ。」

男、男、男。

見渡す限りの男。

遊びに行くような口で、男達は喋る。

辛うじて残っている記憶によると女の方が強いみたいだけど、まあそつとも限らないだろうし、何しろ実戦は初めてだから油断はない。

遊びに行くような軽さで村を襲うってことは、それだけ慣れてるのかもしれない。

「へっへっへっ・・・ん？」

俺に気がついたのか、賊の奴らは厭な笑みを浮かべながらこつちに近づいてくる。

「よう嬢ちゃん。迷子にでもなったのかい？」

「へっへっ……イイ女じゃねえか。これはこの村に期待せざるを得ねえなあ……」

気色悪い。

俺を厭らしい目で見てくる賊達。

何か体が這いずるような感覚、嫌悪感。

この体になってから、男が苦手になった。

この感覚は、全く慣れない。

慣れたい、とも思わないけど。

「お嬢ちゃん、おじさん達に何の用かな？もしかして、イイコトしてくれるとか？」

「イイツすねえ！俺、この娘好みっすわ！」

「俺が声を掛けたんだ。もちろん、俺が最初にシテもらっぜえ……！」

欲望に塗れた目を向けられて、理屈の無い精神的苦痛を感じる。

……よく我慢してる、俺。

「俺は村を守るために此処にいるだけだ。お前達の戯言に付き合う気はない！」

「なんだあ？正義の味方気取りって奴かあ？」

「いやー、カツコイイねえ！おじさん惚れちゃいそっだよ！でもさあ……武器も何もないくせに、何ができるって言うんだよ！」

苦痛しか生み出さない、耳障りな音が聞こえる。

……よく我慢しただろ、俺。

「もう喋るな。むさいんだよ、お前ら。さっさと死んでくれよ」

笑う。

その顔は多分、引きつってるけど。

「クソツ！馬鹿にしゃがつて、ヒイヒイ言わしてやるつじやねえかよ！」

一斉に腰に差した武器を取り、襲いかかってくる。

怒りに顔を歪ませた男達が一斉に駆けてくるそれは、中々に面白い光景じゃないだろうか。

「クソがつ！オラアツ！！」

俺がクスリと笑うと、益々顔を赤に染めて、男の剣が振り上げられる。

斬るというよりも潰すことに長けたその剣は、当たれば確実に骨をやられそうだ。

俺は、この状況でも余裕なようだ。

少なくとも、こんなことを悠長に考えれる程には。

その剣は、ひどく遅く視えた。

その体は、ひどく脆く視えた。

その遅い剣を左手で捌く。

大きな大きな、昂揚感。

初めての実戦なのに、俺の体は何も変わらないらしい。

その脆い体を右手で貫く。

小さな小さな、不快感。

初めての殺人なのに、俺の心はあまり痛まないらしい。

俺が貫いた男は、俺の手から零れるように崩れ落ちた。
その体と繋ぐように、俺の右手には糸が引いていた。

「嘘……だろ……」

何かが喋った気がしなくもないけど、どうせ誰も喋らなくなるだ
ろう。

笑う。

「フ……フフ……フハハハハ！」

その目は多分、笑ってないけど。

アレ？

おかしくない？

おかしいよね？

おかしいよね！？

「嘘……だろ……」

なんで、貫いてんだよ。

なんで、死んでんだよ？

「フ……フフ……フハハハ！」

なんで、笑ってんだよ！？

冗談……だよな？

人間の体を簡単に貫けるほど、素手は強くないはずだ。腹に一撃入れられたぐらいで、簡単に死なないはずだ。人間は、あんな風には

嗤えないはずだ。

そもそも、こいつは笑っているのか？

目を見開いたまま、只々笑い声を発し続ける。

狂ったように、笑い続ける。

こいつのこエを聞いているだけで、何かか抜け落ちていくような気がした。

「ひ、ひいっ！！？」

こいつの狂気に錯乱したのか、俺の仲間が一斉にこいつに襲いかかる。

俺たちは、捕食者だ。

民の命を喰らって生きる。

こいつはこの村の民だから、俺達が襲うのは当たり前のこと。それなのに、俺の体が叫び続ける。

これは、駄目だと。

気がつけば、俺の仲間はまだ数えるほどとなった。

百人は居た俺の仲間、ほとんどが地に伏していた。生きている奴は居るのかと確かめようとして、やめた。居るはずが、ないから。

右腕以外何一つ汚れていない死神が、こっちを向いた。あまりにも美しく、ずっと見ていたいその姿。だけど、俺はこいつを見る訳にはいかない。

俺は、目を逸らした。

目が合えば、死んでしまう気がして。合わなくても、死ぬけれど。

どうせ死ぬなら、死神は見たくない。

とても強い人に助太刀された、ということにしておいた。流石に、五分ほどの間に初実戦の俺一人で殺ったことがばれば、畏怖の視線に晒されてしまう。

良くて、異常者扱いか。

悪ければ・・・殺されるかもしれない。

苦しい嘘かと思っただけど、以外にすんなりと信じてくれた。

すごく、楽しかった。

体を鍛える努力をしたのは俺だから、この体は俺のもの。
だけど、体捌きや技、異常ともいえるほどの力は確実に俺自身のものじゃなくて。

転生者の恩恵としてこんな力を使って、まるで物語の主人公になったような感覚。

人を殺すこと自体が楽しかったのか、自分の力を見せつけるのが楽しかったのか。

或いは両方だったのか、俺には分からないけど。

でも、楽しかったのは、紛れもない事実。

そんな自分が怖くて。

何故か、心地良かった。

呼吸がしづらい。

体が痛い。

まだ足りない体で全力を出したから、しばらくは動くことすらできなと思う。

動けない言い訳を考えないと。

明日からの日々を想像して、少しばかり厭になるけど。

笑う。

その口は多分

きょう、はじめてひとをこころした。

はじめて！（後書き）

チート能力持ったらやっぱり見せつけたくなると思うんですよー
私も無想流舞が使えたら移動が楽に・・・

早く哀しみを背負わせないと他キャラが一切出てこない・・・
陥陣営っていつ出るの???

・・・一話目と繋げるのはまだまだ先になりそうorz

出て欲しい武将とか、感想に書いて頂けると嬉しいです。

苦しいです。評価してください。と書いたらどれぐらいの人が解つてくれるんだろう？

かあさん！（前書き）

可愛い女の子、今のところ主人公一人だけ。

これって、恋姫ですよ？あれ？

かあさん！

もう、三ヶ月経った。

体を動かしたときのあの気だるい感覚も、もうない。

確かにあのときの力は素晴らしかったけど、それから一ヶ月程は腕を上げるだけで激痛が走るほどだった。

本調子に戻るまで三ヶ月掛かるようなものは、とてもじゃないが使えるものじゃない。

欠落だらけの力の穴を埋めるほどの体をつくるために久しぶりに体を動かすと、心地良い疲労を感じる。

・・・悪くない。

じっとしてるのは、多分俺には合わないから。

疲労に押されるように、木陰に座る。

修行という名の体を痛めつけるだけの作業。

傍目から見れば特殊な性癖を持っていると思われても仕方がないこの方法が、残念ながら一番効率が良かった。

技術を磨く必要のない俺ぐらいしかやらない方法だけど、みるみるうちに体が強くなつていくのがわかる。

やり始めたころは毎日のようにぼろぼろになってきて、両親をよく泣かせた。

それからは切り傷など分かるような傷は付けないように気をつけて。

まあそれでも心配はされたけど、泣かせるようなことにはなっていない・・・と思う。

痛みに苦悶の声を上げてのたうち回っていた頃とは、比べ物にならないほど強くなった。

痛みに耐性も出来てきて、声を上げることも少なくなった。

激痛の中でも考えることが出来るようになった頭の中は、戸惑いだけが流れていた。

あのと時の感覚が、未だに抜けきらない。

右手の一撃だけで確実に殺していく、溢れるほどの歓喜に満たされた瞬間。

力のない羽虫を遊ぶように圧倒し、まるでこの世界の神にでもなったかのような優越感に浸る。

本当は、酷く哀しいことで。

それを楽しいと感じてはいけないのかもしれない。
でも、これが楽しくないのなら。

何を楽しいと言えればいいのか、俺にはわからない。

俺は、どうなってしまったのか。

元々俺は、なんでもかんでもいいことをしようなんて考えるような善人ではなかった。

でも、殺人を楽しむような悪人でもなかったはずだ。

この世界では、いや、前の世界でもそうなのかもしれないけど、人を殺すことは必ずしも悪いわけではない。

自衛のために、愛する人を守るために、誇りのために。

自分の命を賭けた戦いは、それだけで格好良くみえると思う。
でも、俺のそれは、悪としか言いようがなかった。

一方的な蹂躪。

村を守るためという免罪符を掲げて、逃がせばいいのに全員殺して。

戦意を失い抵抗すらしない者すら、殺す感覚に酔いしれて。本当に、俺はどうなってしまったのか。

平和を掲げた国で生きていた俺は良心の呵責に苛まれてもおかしくないのに、それどころか・・・

これが、俺の本質なのか。

それとも力に溺れて舞い上がっているだけで、時が経てば苦しむのだろうか。

考えても、仕方がない。

・・・帰ろう。

修行していた森から村へ帰ると、村が賊に襲われていた。

もう、何人かは死んでるかもしれない。

走る。

乱戦の中、賊長を目指して。

また、村を守る。

そう思いながら、賊の一人に跳び蹴りを放つ。

「ぐエエっっ」

顎をずらすように斜めに蹴り上げると、何とも表現しがたい声を発しながら地面に墜ちた。

「クソがつ！ やっちまえ！」

「死ねやあああつっ！」

流石にまた三ヶ月間痛みや気だるさと同棲する気はないから、自分の体が悲鳴を上げない程度の力を使うことにする。

賊が振り下ろした剣の横腹を蹴り、そのまま回し蹴りを放つ。

剣の軌道をずらされて何もないとところに袈裟切りを放った賊の、その隙だらけの脇腹に“気”と呼ばれるものを纏った足が触れて。

何の抵抗もなくその腹を引き裂いた。

「グっ！ かはああつっ！？」

俺の脚が通った道を、真っ赤な飛沫が飛んでいく。

それを見た奴らは驚愕に顔を歪めていく。

それを見た俺の口は、いい曲線を描いているだろう。

初めて殺したときのような、遅く視えるような感覚は、血が滾るような感覚はなかった。

それでも、こいつらには十分すぎる。

それでも、楽しむには十分すぎる。

気分が高まっていくのを感じながら、邪魔な奴を殺していく。

前ほどの力はなくても、やっぱりそれは、蹂躪で。

やっぱり俺は、笑ってる。

襲い来る賊達を殺し続けながら、長に近づいていく。

眉間を狙った突きをかわして、逆肩に手を当てそのまま踏み込みながら振り下ろした。

十字に引き裂いた体から飛び散る血飛沫を、全身に浴びる。

村を守るために戦っていることももう忘れた俺は、顔にまでかかる朱に顔を顰めた。

撒き散らしながら目の前で崩れる男の武器を手に取り、思いっきり投げ飛ばす。

俺と長を一直線に結ぶようにその槍は進み、俺もその後を追うように走る。

その槍は道を切り開くかのように壁を一つ、二つと打ち破り……四つ目の壁を貫いたところで、先が潰れて止まってしまった。

男四人を串刺しにして役目を終えた槍の活躍は、道を創るには十分だった。

「ヒイイ！や、やめてくれ！殺さないでくれ！」

情けなく喚く姿を見ても、何も感じなかった。

恐怖に歪んだ顔を見て、快感を得る変態もいるらしいけど、俺はそんな性癖は持ってなかったようだ。

強いて言うなら……

ただ、殺したい。

笑う。

俺は、その首に手を掛けて

父さんが、胸を斬られるところを見た。

「くそがあっ!!」

「ぐほうっ!!」

焦りに任せて胸を蹴る。

体を蹲らせて痛みにもがいてる奴なんて、もうどうでもいい。

こんな奴、いつだって殺せる。

一体何を、舞い上がっていたのか。

村のみんなが襲われてたのに、見向きもしないで一人で笑って。

こうなることだって、予測出来たんじゃないのか。

人を殺すことに夢中になって。

助ける力を持っているのに、親を助けるなんてことは、考えすらしなかった。

走る、走る、走る。

なりふり構ってられなくなつて、力を解放する。

体の軋みを無視して、父さんの許へ走る。

全てが遅くなる感覚。

圧倒的な速さで、でもその程度じゃ遅すぎで。

崩れる父さんの首に狙いをつけたその剣は

母さんの体に阻まれた。

恐怖に押されて賊長が逃げ帰ると無駄と察したのか、他の奴らも一斉に引き揚げた。

何もなかったかのような静けさと、荒らされた後だけが残された。空は、俺の気持ちに反して、快晴だった。

「お母さんによく似て、とても綺麗だねえ！これは、引く手あまたじゃないか！」

正直、男から容姿について言われるのは嫌だった。

でも、母さんとよく似ていると言われるのは、満更でもなかった。だって、母さんが喜ぶ顔が見れるから。

子離れの出来ない母だったけど、それだけ愛してくれてるってことでもあつて。

俺も、母さんを愛していた。

「くっ……はぁ……」

「親父……」

止血だけ済ませた父さんが、かすれた声で呻く。

いつからか、俺は父さんと呼ぶのが恥ずかしくなった。

だから、親父と呼ぶ。

初めて親父と言ったときは、かなり嫌そうにしてたけど。

「ひ……ひじ……り……」

父さんが俺の名前を呼ぶ。

母さんが付けてくれた真名で呼ぶ。

もう居ない、母さんが

「ひじ……り……お前が……生き、て、て……」

「頼むから喋るな親父！頼むから……！親父まで……」

親父まで居なくなるのはやめてくれ、とは言わない。
だから、抱きしめる。

優しく、優しく……母さんがするように。

なにも出来なかった・・・何もしなかった俺がそうする資格はないと思うけど。

暫く経つと、ふと、小さな声で父さんが言った。

「聖、お前はよくやった。よく村を守ってくれた。」

涙が溢れる。

不安や悲しみをあやすように、俺の背中をさする。

父さんだつて悲しいはずなのに、俺の涙を受ける。

斬られた胸で、痛むその胸で、俺の涙を受ける。

この涙はそうじゃないのに。

村のことなんて考えてなかった俺が、村を守ったなんて。

自分の欲望に吞まれてこの戦いを楽しんだ俺が、よくやったなんて。

そんなの、皮肉にしか聞こえないじゃないか。

痛い。

心が痛い。

思わず涙が出た。

その涙すら受け止めて、俺の心配をして。

自分のことしか考えなかった俺と、自分のことよりも俺のことを考えた父さん。

自分がどれだけ屑なのか、自分がどれほど屑なのか。

胸が締め付けられるような、そんな感情。

涙が、溢れ続ける。

今日は、快晴。

自分の汚れた涙を、隠すことすら出来やしない。

楽しかった。

人を殺したときの感覚。

あの満ち足りた感覚は、もう病みつきになりそうで、これ以上ないってくらい、楽しかった。

でも。

流石に今は、笑えない。

かあさん！（後書き）

ひじりちゃんひじりちゃん。

聖帝からとりました。

顧みぬと、退かぬと、槍投げをやってみた。

わかるような文章になってるかな？

聖帝さん技少ない・・・体力も少ないorz

要望（出て欲しい武将とか、こういうネタが欲しいとか）や、
妄想（あの子可愛いとか、なにになににちゃんぺろぺろとか）などは、
感想に書いて頂けると嬉しいです。

えいせんきさまなにを考えている・・・
評価されるのを望んでいるのかそれともジャマになったか！
ふん・・・まあいい・・・

とうさん！（前書き）

久しぶりに、ゲーセンに行ってきました！
友達のトキ相手にサウザーで六連敗した後。
ケンシロウで十連勝しました。

あれ？なんか目にゴミが・・・

とうさん！

母さんが死んでから、半年が経った。

父さんの傷は完全に塞がって、村も大分元に戻った。

村のみんなの笑顔も、大分元に戻った。

すれ違う人の数は、元には戻らなかった。

男が叫ぶ。

殺さないでくれと、情けなく喚く。

それを見て、笑いながら近づくと俺。

俺はそこにいるはずなのに、その光景を何故か後ろからぼんやりと見ている。

その俺は、その首に手を掛けて

父さんの首をへし折った。

「う、うわあああああああつっつ!」

全身から汗が噴き出る。

頭が痛い。

笑いながら父さんを殺した俺は、果たして本当に人間なのか。

生きる価値は、あるのか。

震える腕を無理やり動かして、俺自身の首を締めあげる。

爪が食い込み、血が流れ始めたところで、ようやく俺はあれは夢だったのだと理解できた。

理解は、出来たけど。

あれが嘘とは、思えなかった。

ひどく、落ち着かない。

俺が父さんを殺すなんてことは、ありえない。

ありえない・・・はずだ。

自分のことよりも俺のことを考えてくれて、痛む体で支えてくれた父さん。

父さんが喋る何気ない一言ですら、俺を一番に考えてくれてることがひしひしと伝わってくる。

俺が包帯を巻きなおすときも、無駄な時間を取らせてしまって悪いなと言って。

俺が甲斐甲斐しく父さんの世話をしたのは、俺の痛みを和らげるため。

父さんに必要とされることで、自分に酔い、俺の罪から目を背けるため。

屑な俺の、せめてもの罪滅ぼし。

何故か、痛みは和らがなかったけど。

ひどく、落ち着かない。

俺が父さんを殺すなんてことは、ありえない。

ありえない・・・はずだ。

・・・本当にそうなのか？

久しぶりに、父さんと一緒に寝よう。

久しぶりに、父さんに甘えよう。

そうすれば、夢を忘れると思うから。

「お、親父？」

父さんの部屋に入って、控えめな声を投げかける。

昔と何も変わっていない、父さんの部屋。

昔より一人減った、父さんの部屋。

「ひ、聖か。どうかしたのか？」

少し裏返った声が、返ってきた。

「そ、そのう・・・一緒に・・・ね、寝て欲しいん、だ、けど・・・」
「い、一緒にか？」
「う、うん」

面と向かって言う勇氣がなくて、下を向きながら口にする。
顔が赤くなつていくのを感じる。
見上げた父さんの顔も、赤かった。
・・・恥ずかしい。

最近、父さんが俺のことを避けていて、ちょっと・・・いや、かなり悲しい。

俺が世話をした頃から妙にそわそわして、変だなあとは思つた。
それから傷が塞がり始めて、父さんが一人で動けるようになった途端に避けるようになったから、多分俺に迷惑を掛けたくないんだと思う。

それが俺の存在を否定するように見えて、正直とても苦しい。
父さんが必要としてくれない悲しさを、どうしたらいいか分からなかった。

・・・目が熱い。

「だ、だめか？」
「い、いや・・・構わない、けど・・・」
「ほ、ほんと？」
「あ・・・ああ。本当だ」
「・・・ありがとう」

父さんの腕に包まれて、父さんの服を掴む。

父さんの匂いに包まれて、母さんの名残に包まれて。

小さい頃、三人でよく寝た場所。

二人の腕の中は、とても暖かくて。

毎日が、幸せだった。

父さん一人の腕だけ。

ぬくもりは、変わらなかった。

あったかい。

さむい。

父さんの腕の中にいるはずなのに、俺の肌は冷たかった。

まるで裸で居るような・・・

腹に、重い何かに乗った。

体の違和感を確認するために、重い瞼を開ける。

一番初めに目に映ったのは、全裸で俺に跨った父さんだった。

「・・・え？」

俺は寝惚けてるのかな。

そう思って、目をこすって再び見てみる。

・・・別に、寝惚けてなかった。

「親父？これは一体？ちよっと待ってよく分から・・・！」

短剣を首に押し当てられた。

少し首が切れて、血が漏れる。

少しずつ、状況が分かってきた。

裸なのは父さんだけじゃなかった。

寝ている間に脱がされたらしく、俺も裸になっていた。

裸の父さんが、裸の俺に跨ってる。

うん。

ようやく、理解した。

突きつけた短剣に力を込め続けながら、父さんが淡々と語り始める。

「・・・なあ、聖。今から俺が何をするか、分かるか？」

空から降る雨のせいで、決して静かじゃなかったけど。

その声だけが、脳に響く。

「お前が悪いんだぞ、聖。お前が優しくするからいけないんだ。母さんが目の前で殺されたとき、胸の傷なんて比じゃないほど痛かった。その後、聖が無事なのを見て、せめて聖だけでも幸せにしてやる。と俺は母さんに誓ったんだ。その次の日から聖は、傷が酷いからって俺の世話をしてくれたよな。あのとき俺は、死ぬほど嬉しか

った。聖はお母さんっ子だったから、そこまで俺と一緒に居なかつたよな。だから、甲斐甲斐しく世話をしてくれて、一日中近くに居てくれて。胸の痛みを忘れるくらい、嬉しかった。今までは少し素っ気ないくらいだったのに、急に優しくなって。その姿を見て、俺はやっぱり母さんに似てるなって思ったんだよ。そう、似てる。似すぎてる。大きくなって、母さんに似て美人になって。そのうえ、母さんみたいに優しくなって。俺はな、聖。俺は、お前に惹かれたんだ。お前に惹かれたんだよ、聖。お前の優しさに、惹かれたんだよ。俺は、自分を疑ったよ。なあ、聖。分かるか？俺は実の娘に欲情したんだ」

何かに怯えるように、父さんの体が震える。
でも、声だけは、震えてなかった。

「だからお前を避けた。お前に会いたくなかった。会えばお前を意識してしまうから。実の娘としての聖じゃなくて、性の対象としての聖を。だから避け続けた。避ける度に悲しそうな顔をするお前を見て、俺は心が痛んだ。陰で泣いてるお前を見て、息をすることすら苦しくなった。お前を幸せにすると誓いながら、お前を泣かせたんだ。ひどい親だよな。でも、俺は避け続けた。避け続けるしかなかったんだ。お前を、最後まで、娘として愛したかった。お前を抱く訳にはいかなかった。なのに、今、俺はお前を抱こうとしている。最低な男だよ、俺は。涙目で駄目かと問われて、駄目と言える親じやなかった。好きな女が胸の中に居るのに、何もしないような男じやなかった。・・・なあ、聖。俺が、お前をどうしたいのか、分かるか？」

何かを堪えるように、父さんの目から涙が零れる。
でも、声だけは、震えてなかった。

「俺は、お前を犯したい」

声が、脳に響く。

自分の声。

声が、脳に響く。

同じ言葉が、何回も。

殺せ。

ただ、それだけ。

心の奥から、聞こえる言葉。

少しずつ、大きくなって聞こえてくる。

大丈夫。

俺なら、父さんが首を切るより速く殺れる。
殺せ。

耳元で囁くような声。

その声に俺は従う。

俺は、父さんの首に手を掛けて

やめた。

今、犯されようとしているけど。
今、一線を越えられようとしているけど。

俺は、父さんを殺さない。

父さんの気持ちでそれで治まるのなら、もう構わない。
別に、初めて抱かれるときの理想なんて持ってないし、他の男に
抱かれるよりは幾分かマシだと思う。
それで満足するのなら、我慢する。
そもそも、俺は悪夢を忘れるために父さんの部屋に来たから。

俺には、父さんが必要だから。

「聖。・・・なぜ抵抗しない？」

首に掛けた手を下ろした俺の意図が分からないのか、疑問の声を
挙げる。

「親父の・・・親父の好きにすればいい」
「何故だ。構わないのか？」

「構わない。親父が満足するなら別にいいよ。母さんが死んじゃったから。もう親父しかないから。俺には・・・親父が必要だから」
それを聞いた父さんは、悲しそうな顔をして、手に持った短剣を振り上げて。

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

自分の肩に、突きたてた。

「うっ・・・・・・・・うっ・・・・・・・・」

理解出来ない。

俺を犯したいんじゃない、なかったのか。

呻き声を聞きながら、謎の状況を、ただ見ることしか出来ない。

「・・・・・・・・違った・・・・・・・・」

「え？」

父さんの言う意味が分からなくて、素っ頓狂な声を挙げる。

「お前を抱きたいんじゃない、俺は・・・何も見てないだけだった・・・・・・・・」

「お、親父？」

「分かったんだよ・・・俺は、お前に惹かれたんじゃない、俺は・・・」

「・・・お前に欲情してたんじゃないかな。俺は・・・俺は、ただ、お前と・・・聖と母さんを重ねていただけだった」

堪えることをやめた父さんの目からは、涙が流れ続けていた。

「俺は、認めれなかったんだ。母さんが死んだことを。だから、聖を母さんと思い込んで、抱こうとしてただけだったんだ。抱いて、俺の心の傷を埋めようとしてただけなんだよ。埋まるはずもないのにな。・・・聖が首に手を掛けたとき、俺は嬉しかった。聖が抱かれても構わないと言ったとき、俺は悲しかった。俺が望んでたことのはずなのに、心の穴は広がったよ」

「・・・親父・・・」

「俺の心が母さんの死を認める前に、死にたかったんだ、俺は。屑だ。娘を利用して死のうとした最低の屑だ。死ぬなら自分で死ぬばよかったのに」

「親父が・・・死ぬ必要はねえよ。親父は悪くない」

全部、俺が悪い。

母さんを死なせたのは俺だから。

「聖。一つだけ頼みがある」

「・・・何？」

「もし、最低で屑な俺をまだ愛してくれるなら・・・名前を原に変えて欲しい。蘭という名は、母さんが付けたからな。俺も何か、残したいじゃないか」

「親父！？何でそんなこと」

「

まるで、遺言。

俺への願いを言い終わると、肩に刺さった短剣をそのまま引き下ろした。

「うっ……かはあっ!!」

「な、何してんだよ、親父!」

「し、死にたいからに……決まってる……だろ……」

何で。

俺には、父さんが必要なのに。

声に出して、伝えたのに。

どうして、分かってくれないの。

視界が歪んで、父さんが見えない。

「親父……!何で……な、何で死のうとするんだよ……!俺には親父が必要だって、言ったじゃねえかよお……」

嗚咽交じりの声で、心の痛みを吐きだしていく。

「もう……死ぬしか……ないんだよ……」

「なんでなんだよお!ばかやるお……あんななんか、死んじまえばいいんだ……!」

「……はは……嫌われちゃったなあ……」

違う。

こんなこと、言つつもりなんてないのに。

「ひじ、り……もう、一回だけで、いい、から……とう……さんって……呼んで……ほ、し……い……」

父さんと一緒に寝て、いやなことを忘れて。

明日から、心を入れ替える予定だった。

こんなこと、望んでない。

「・・・・・・・・父さん・・・・・・・・」

返事を待ってみたけど、返ってきたのは雨音だけ。

愛ゆえに人は苦しまねばならぬ。
愛ゆえに人は悲しまねばならぬ。

確かに、そうかもしれない。
こんな痛みを受けるのは、愛のせいかもしれない。

愛の証。

母さんがくれた真名と、父さんがくれた名前。
俺が背負うのは、これだけ。

俺は丁原。

真名は聖。

これだけしか、残ってない。

愛される感覚は、嫌いじゃなかった。

でも、もう限界。

こんなに苦しいのなら、悲しいのなら。

もうこれ以上。

「愛などいらぬ・・・」

小さい頃、三人でよく寝た場所。

二人の腕の中は、とても暖かくて。

毎日が、幸せだった。

今はもう、一人。

とうさん！（後書き）

これはひどい

初めは、お父さんに涙目をお願いするひじりちゃんを書きたかった
だけなんです！本当です！

キリサケでガークラ+蓄積でピヨったときぐらいひじりちゃんの心
がボロボロに・・・

私なら確実に鬱になりますね・・・

愛ゆえに人は感想を書かなければならぬ！！

愛ゆえに人は評価をせねばならぬ！！

愛ゆえに・・・

とまどい！（前書き）

お、女の子や！

ようやく恋姫、始まります。

とまどい！

村を追い出されてから、三年が経った。

村を追放されたのは、父さんが死んだ次の日。

傷心の俺を指差して、人の皮を被った悪魔めと叫ばれた。

自分の親が目の前で死んでるのに平気なのは、自分が殺した証拠だと騒がれた。

・・・平気な風に、見えたのか。

まあ強ち間違いでもない気がしたから、否定はしなかった。

死ね、丁蘭と罵る声が周りから浴びせられた。

別に、心は痛まなかった。

元から傷のある心は、痛み慣れていたし。

父さんと一緒に、丁蘭は死んだから。

宿から出て、今日の仕事を探す。

追放されて金もなかった俺は、毎日のように賊を襲って食い繋いでいた。

何も食べれずに一日が終わるなんてこともある、不安定な生活を送っていた。

どこかの領主のところまで客将をするのが一番いいと思うけど、そんなことをするぐらいなら、死んだ方がマシだ。

上から命令されるのには耐えられないし。
好きなときに人を殺せないのも嫌。

愛などいらぬと心に決めて、丁原として生活し始めてから、少し思考が帝王化してきてる。

あと、これはいいことなのか分からないけど、殺人願望を受け入れられるようになった。

両親のことは未だに引きずってるけど、夢に見ることはなくなっ
た。

賊と楽しく遊びながら転々と移動し続けて、半年ほど前に此処、
漢中に着いた。

すれ違う人々の笑顔がこの街の素晴らしさを物語る。

ここまで争いのない街は、賊が年々増え続けているこの時代には
そうそうないだろう。

少しだけ滞在する予定だったのに、気づけば半年間も此処に居る
くらいには、俺もこの街を好きになっている。

好きな理由は、少し違うけど。

この街は、兵を直接募集しない。

気がつけば、精強な兵が増えているから。

この街が他の街と大きく違うところが、この漢中依頼板だ。

この街の兵は、国同士の戦争や勅命があるもの以外では基本的に
動かない。

周りの小さな村からの救援依頼に応じたり、賊の拠点を叩きに行
くのは兵士達じゃないのだ。

この街の人達が、善意で動くのだ。

この漢中依頼板には、沢山の依頼が貼られてある。

店の厨房を手伝って欲しいというような依頼から、賊の討伐などの命を張るものまで種類は様々。

依頼を完了すると、依頼主や国から報酬が出る。

そして命を張る依頼を完了したものは、兵士になって私達と共に戦ってくれないかと持ちかけられるのだ。

既に兵士として活動している者は少し給金が上がったりすることもあるらしい。

自分でその都度依頼を選ぶので、縛られることもない。

これだけ聞けばとても素晴らしいものに聞こえるかもしれないが、致命的な欠点がある。

依頼の失敗は、自己責任。

何をあたり前なことをと思うかもしれないが、依頼主は何も保障してくれないのだ。

兵士として戦場に送り出されてそこで戦死したら、手当というものが付く。

残された家族達が金に困ることのないように、国からある程度の金が出される。

でも、依頼で出かけて帰って来なかった場合、何も残らないのだ。勝手に居なくなった、ただそれだけ。

その後のことは、誰も面倒を見てくれない。

いくら報酬が高く設定されているとはいえ、死んだら元も子もない。

それでも、善意で動けるか。

それでも、命を懸けられるか。

だからこれは、とある理由から正義感が強い人が異常に多いこの街でしか、採用されてない。

俺がこの街を好いている理由はただ一つ。
無駄に報酬が高いこと。

全ての屋根に、文字の書かれた旗が立てられている。
ふと見る度に、苦笑い。
見渡す限りの“五斗米道”。

中々においしい依頼を見つけたので、それを受注して早速向かう。
人を二百人殺すだけで金が貰えるなんて・・・俺、幸せ。
クルクルと踊りたい衝動に駆られる。
・・・が、誰かに見られたら死にたくなるので自重することにした。

同じ風景ばかりが広がる森を進み続けると、微かに匂う血の香り。
胸が高鳴るのを感じながら、俺は少し疑問を覚えた。

この先にある玩具の溜まり場は、邪魔が入らないように受付のお姉さんに頼んだはずだ。

基本的には、同じ依頼を何人が受けても構わないことになっている。
報酬指定が一人いくらではなく、一つの依頼にいくらと

なっている。

いて、人数で報酬が割られて渡されるようになってい
つまり、人数が少なければ少ないほど、取り分が多いのだ。

報酬を一人占めしたときは、そりゃもう、かなり気持ちイイ。
だから、俺が受けた後に誰も受けられないようになって、お姉さんに
頼み込んだ。

俺以外で頼んだ人はまだ居ないらしい。
というか、一人は俺しか居ない。
別に俺が嫌われてるとかじゃなくて、せつかくの楽しみを邪魔さ
れるのが嫌なだけだと言っておく。

もう血の匂いがしているということは、今回は残念ながら俺一人
じゃないらしい。

平らな胸の俺が、巨乳のお姉さんに、頭を下げたのに。
……千切れてしまえ。

俺は、あの胸を揉みしだくことを決意して、匂いの許へ急いだ。

楽しい。

指に気を込めて玩具に触れると、面白いように切れていく。
足に気を込めて玩具を蹴ると、面白いように飛んでいく。
腹を蹴られた玩具が後ろの木にぶつかると、その木の幹が、へし
折れた。

跳ね返るように地に伏した最後の玩具の頭を、気を纏わせて踏み
抜いた。

緑豊かな風景を、赤色に染め上げる。

真つ赤な葉の先、滴る濃紅。
濃厚な蜜を、撒き散らし。
腰まで届く、紅い髪。
じっと見つめる、二つの瞳

え？

そこに、女が居た。
艶のある、紅の髪。

派手な装飾はないけど、一目見て上質なものとわかる、黒を基調にした軽甲。

手に持つ槍には、赤い螺旋が描かれている。
力強い雰囲気を漂わせる、格好いいその風貌。
その目が、ずっと俺を見てる。

忘れてた。

先客が居たんだった。

今までにも、何回か見られたことがある。
欲望のままに蹂躪した後の惨状を見て、皆俺に怯えた。
普通の殺し方より、派手に殺ったほうが達成感があるというかな

んというか。

今みたいに、あえて目を背けたくなるような感じにしたりするところがある。

女の人が口を開けた。

大体この後は叫ばれる。

酷い、最低みたいなことを言われる。

よく叫ばれる言葉は、化け物とか、鬼とか

「天使さま・・・」

悪魔とか。

・・・これは。

流石の俺も、予想外・・・というか、予想出来る気がしない。

この惨状を見て天使と答えられる人は、一体何人ぐらいいるんだろ
う。

「あの、名前は何と言うんですか？」

「て、丁原だけど・・・」

いきなりの質問に吃驚して、反射で答える。

すると、俺の血塗れの手を取って女の方は喋った。

「私は高順、真名は秀です！」

高順は、俺の手に指を絡めて、顔を近づける。
何故一緒に真名まで言ったのか
というか、何か目が熱を帯びてるような

「私の妻になって下さい！」

思考停止。

「どうかしたのですか？」

しれっと言った、しれっと。

全く状況が分からない。

少し、おかしいんじゃないかなろうか。

えーと・・・妻と言ったよな？

俺より胸がある気がするけど・・・

「・・・お前、男なのか？」

「女です。・・・女同士では、いけませんか？」

切れた頬から流れる紅は、首を伝ってその胸へ。

・・・エロい。

そうじゃなくて。

「あのさ・・・初対面でいきなりそれは

」

「初対面でもいいじゃないですか。いきなりでもいいじゃないですか。関係ないです、そんなこと。どうでもいいです、そんなこと。会って間もないですけど、分かります。私は

」

どうすればいいか分からないから、とりあえず聞くだけ聞く。

何て言われるんだろう？

一目惚れしちゃいましたとか？

あなたの運命の相手ですとか？

あなたのことが好きに

「 私はあなたを“愛”しています

」

何で、それ言っちゃっつかない。

とまどい！（後書き）

サウザーと言えばシユウ！（え

高順の真名はそのままシユウから取りました。

お……………お師さん……………

む……………むかしのようにな……………

もう一度評価を……………

やじろい！（前書き）

あのままだったら、秀ちゃんが変態と思われてしまう！

短いっ！

やひろしー！

「しゅーちゃんー！しゅーちゃんー！」

「どうしたの？」

「しゅーちゃんは、どこにもいかないよね？」

「いかないよ、どこにも」

「しゅーちゃん、だいすき！」

「わたしも、すきだよ」

「しゅーちゃん、あいしてる！」

「わたしもだよ、　　ちゃん」

少し前まで人間だったものが、私の前に落ちてきた。

いや、落ち続けている。

もう既に百人ほど落ちてきたのに、それはまだ増え続ける。

彼女の手足が止まらない限り。

噂を聞いた。

漢中の街は争いが起こらず、兵士ではなく街の人達が周りの賊を倒すのだそうだ。

さらに、漢中のみに存在する新宗教があるらしい。

全て嘘みたいな話だったけれど、漢中の街には興味があったから、街に行くついでに確かめてやることにした。

毎日少しずつ疲労が溜まっていくのを感じながら、漢中の街を指し歩く。

あと一刻程で着きそうなところで、私は運悪く賊の拠点に引っかけた。

一斉に襲い来る敵を槍で丁寧に突き崩していく。

だが、いかんせん数が多い。

もう四十半ばを突いているというのに、一向に減る気配がない。

ざっと見ただけで、後百五十ほどは居そうな雰囲気だった。

疲労も蓄積されているこの状況では、このままでは囲まれて終わってしまう。

私はそう思い、無理やり突破して街を目指し走ることにした。

私の槍は、普通の槍よりも突くことに特化している。

先を細く堅くして、突いたときの抵抗を減らし、突きが浅かったときでも十分な傷を付けれるようにした。

反面、横からの刺激に対して弱くなっているから、薙ぎ払うような使い方は一切出来ない。

だから、万が一囲まれるようなことがあれば、死を覚悟しないといけない。

まだ死にたくない私は、突破するしかなかった。

足音が聞こえる。

賊達は、ずっと追いかけてきているようだった。諦めてくれればいいのにと、少し毒づく。

そんな私の気持ちに気づくこともなく、・・・気付いたところで諦めてはくれないだろうが、足音は近づいてくる。

疲労で足が重くなり、その場でへたり込む。

足音がすぐ近くまで来ている中で、何か打開策はないかと考える。考えて・・・神に祈るくらいしか返って来なかった。

足音が目の前で止まり、何かを振りかぶる音が聞こえる。

終わるのかと、そう思い

鮮血が、飛び散った。

体が崩れる音が聞こえ、視界に男の首が見えた。

顔を上げる。

不敵に笑った女の顔が脳に焼きつく。

肩で揃えられた銀の髪。

私より少し小さいくらい、艶やかな体。

黒の服を妖しく着崩したその女が、心の底から楽しそうな笑顔をしている。

顔が火照るのを感じながらも、その女から目が離せない。

血塗れの手で、足で今も殺し続けている。

女の背中に、光が差し込む。

最後の一人の頭を踏みぬいたその姿は、とんでもないほど残酷で、
どうしようもないほど、美しかった。

「天使さま……」

そう呟いてしまうほど、幻想的な美しさ。

「私の妻になって下さい！」

「……」

「秀ちゃん、どうかした？」

「おかしくなった？」

「なによ。女同士じゃ、駄目っていうの？」

「ちゃん、なんで？」

「私は秀ちゃんを」

「

「あの、名前は何と言うんですか？」

「て、丁原だけど……」

突然質問したからか、上擦ったような声を挙げる。

その声にも反応してしまう私は、丁原さんの血塗れの手を取って話し掛ける。

「私は高順、真名は秀です！」

私は、丁原さんの手に指を絡ませ、顔を近づける。

真名を言ったときに、胸が熱くなって。

記憶の中の回答を、口にしてみる。

「私の妻になって下さい！」

これは、正解ではなかったのか。

答えてくれないと、分からない。

「どうかしたのですか？」

不安に駆られて、言葉を発した。

よく分からないといった風に、首を傾げる丁原さんを見て、私は、鼓動が速くなるのを感じた。

なぜか胸を凝視する丁原さん。

「……お前、男なのか？」

「女です。……女同士では、いけませんか？」

私の顔から胸を見て、顔を赤くしてもじもじしだす丁原さん。
その破壊力に、胸が爆発しそうだ。

・・・少し、雰囲気が変わった。

「あのさ・・・初対面でいきなりそれは

「初対面でもいいじゃないですか。いきなりでもいいじゃないですか。関係ないです、そんなこと。どうでもいいです、そんなこと。会って間もないですけど、分かります。私は

拒絶されるような気がして、心が痛んだ。

それ以上何も言っただけで欲しくなくて、遮るように早口で捲し立てる。
私は。

次の回答を口に出す。

多分、きつと。

これは、正解。

「 私はあなたを“愛”しています

“愛”という言葉聞いた途端、泣きそうな顔をして下を向いた。
それを見て、あなたのことを好きな訳が少し分かった気がした。

わたしと、あなたは、たぶん、おなじ。

どじるい！（後書き）

実際にそんな槍があるのかは知らない。

まあ、恋姫だしいいよね？

今より輝こうとする 評価たちの光を奪い去ることは許さん！！

こくはく！（前書き）

ハート戦で、心を折ってきました。

丁寧立ち回らないといけないし、三回触れたダメージが一回触れたダメージに負けたりするし。

一回事故るだけで殺されるんです。

七対三ぐらいついてるから、逆にプレッシャーが強かったりして。

サウザーにも、そのガーキャン分けてください。

「くはく！」

「・・・なあ、お前」

「お前なんて、言わないで下さい。秀と呼んでくれませんか？」

「・・・秀。なんでこっちに来るんだよ」

「聖さん、言いませんでしたか？私は元から漢中の街に行く予定だったのです」

「そうじゃなくて・・・」

それは、さっき聞いた。

沢山囁かれている、馬鹿馬鹿しい噂を確かめに来たとか何とか。まあ、あいつの街だし何を噂されてもおかしくはない気がする。

そうじゃなくて。

「なんで、“こっち”に来るんだよ」

近いのだ。

普通に歩けばいいのに、あろうことか腕を絡めて体を傾けてくる。

綺麗なお姉さんが密着しているところを、想像して欲しい。

しかも、自分のことを好きだと言ってくれる相手だ。

愛していますなんて言われてしまったことを差し引いても、興奮してしまうのが男じゃないのか。

体が女だから、目に見えて変わるモノがないけど。

軽甲のおかげで胸の感触が分からないのが、せめてもの救いか。

「私は賊に襲われていたんですよ？そこを聖さんが助けてくれたんです。まさか一人で歩けなんて、言わないですよね？」

言わない、言わない。

でも、近すぎるじゃないか。

「私はあなたを愛しているんです。だからあなたを見ているんです。まさか見ることもやめるなんて、言わないですよね？」

言わない、言わない。

でも、近すぎるじゃないか。

「それに、真名で呼ぶ者同士はこうしてもいいと、母から聞きました。まさか母の教えに背けなんて、言わないですよね？」

言えない、言えない。

そんなの、言えるはずがないじゃないか。

真名を明かされたときは、自分の真名も言わないと駄目よ？

そんな“母の教え”に従って真名を言ったのだから、諦めるしかなさそうだ。

結局街に着くまでそのまま、俺の劣情は蓄積され続けることになった。

「噂では聞きましたが、まさか本当だったなんて！この街はすごいですね、聖さん！」

「そ、そうだな・・・」

この街に着くまで絡めていた腕を、まるで俺から絡め始めたとも言わんばかりに振りほどいて、はしゃぎ回るこの変人。

周りの目も気にしないでクルクルと踊りだす秀を見て、依頼を受けたときに踊らなかつた俺を心の底から褒めてやりたくなつた。

「あ！ちよつと聖さん、どこに行くんですか？」

変人を視界に入れないように依頼板に向かう俺の腕に、また腕を絡めてくる変人。

劣情を催したさつきと全く同じように腕を絡めてくる秀を見ると、嬉しそうにはにかんだ。

それと同時に寄せられてくる沢山の視線。

何故か俺の劣情は、元からなかつたかのように霧散した。

「依頼、完了したけど」

「それでは、案内致します。・・・そちらの方は？」

「気にしないでもらえる？」

「は、はあ・・・分かりました」

俺の思いが伝わったのか、隣存在のことを無視してくれた受付のおっさん。

命を張る仕事を終わらせると、あいつのところに連れて行かれるようになっている。

あのお姉さんは、今は休憩中なのか姿が見当たらない。

・・・胸を揉ませてはくれないのだろうか。
いや、難癖を付ければ少しくらいはいいと言ってくれるんじゃないか。

変なものが憑いてきたのは貴女のせいだ、どうしてくれる！
それでは、私の胸で謝罪します。

そんなくだらないことを考えて逃避することぐらいは、許される
と思いたい。

「おお！本当にあるんですね、漢中掲示板！凄いですね、聖さん！」
俺の名前を大声で叫ぶ声を見無視して、受付の後を付いていく。

「どうして無視するんですか！？待って下さいよ聖さん！」
無視したことを抗議しながら、俺の隣まで走ってくる。
そして、俺と同じ歩幅で憑いてきた。
当然のように、腕を絡ませて。

・・・嗚呼、視線が痛い。

「愛していますか、聖さん！」
「激、お前黙れよ」

部屋に入って開口一番、こんなことをのたまう莫迦。
人を待たせておいてそんなことを一番に言うこいつは、この国の王である。

後ろで纏めた、淡い黄色の髪。

全てを癒すような、柔和な顔。

その髪と同じ色の服を着た、妙齡の女性。

激という真名とは真逆の、母性に満ち溢れた雰囲気。

そして何より、デカイのだ。

何がと言わない。

言ったら何か大事なものが崩れ去るような気がしたから。

「聖さんは、私の愛を受け取ってくれませんでした！」

「おい秀、お前なんてことを」

「まあ、なんてこと！何故彼女の愛を受け取らないのですか！」

始まった。

「いや、その・・・だな？会っていきなり愛を受け取れー、なんて」

「会っていきなりでもです！どうして愛を拒絶するのですか！？こんなにも愛は素晴らしいのに！」

愛が素晴らしいのは、分かってる。

だからこそ、愛は要らない。

「愛に飢えた人達もこの世界には沢山いるんですよ！？あなたがその思いに愛で答えるかどうかはともかく、受け取るだけでも価値あることなんです！それを、あなたは

！やはり、あなたの愛に対する価値観を変えなければいけませんね。どうですか、私達

の“五斗米道”に」

「激、お前何しに来たんだよ」

「おお、そうでした！」

俺が声を掛けなかったら永遠に続きそうなほど、愛に煩い。
それが激だ。

「聖さん、私達と　　あ！その前に、自己紹介しないといけませんね！私は張魯、五斗米道の師君です」

秀が居るのを思い出して、激が名乗った。
師君というのは、五斗米道を束ねる教祖のような存在らしい。

「張魯さんですね。私は、高順と言います。聖さんに振られた、可哀想な女です」

「可哀想な女だなんて、そんなこと！聖さん、何故彼女の」

「激。本当、何しに来たんだお前。・・・帰っていいか？」

漫才をするぐらいなら、お姉さんの胸を揉むための作戦を考えた
い。

「おお、そうでした！聖さん、私達と一緒にこの街を守りませんか？」

「断る。大体、こここの兵士になる気はないって何回も言ってるじゃないか」

「こんなに言っているのに断るのは、聖さんだけですよ・・・」

この街で断るのは、確かに俺ぐらいかも知れない。

激に声を掛けられるだけで、死んでもいいという人も居るくらい

なのだから。

愛を掲げる完全に危ない宗教。

それが五斗米道なのだ。

「あ、聖さん！涼州に行く気はありませんか？」

「？いきなり言われてもよく分からないんだが・・・」

「実は、藍さん・・・馬騰さんから、羌族が暴れ回っているのを貸してほしいと言われまして、それで聖さんに行ってもらいたいのですが・・・」

「どうやら仕事の依頼、らしいけど・・・」

「俺に？なんで？別に軍でも派遣すればいいんじゃない？」

「お願いします！閻圃にも就いてもらいますし、報酬は今日の十倍出します！」

「分かった。引き受けようじゃないか」

そのエンホとやらは誰か知らないが、報酬が十倍はおいしすぎる。受けない訳にはいかないじゃないか。

「聖さんが行くなら私も付いていきます！」

「駄目だ！」

「どうしてですか！」

「お前と一緒に来たら、俺の取り分が減ってしまう！それは駄目だ！」

「私はあなたを愛したいだけなんです！金なんて要りません！」

「でも」

「聖さん、また彼女の愛を拒絶するのですか！聖さん、何故彼女の

「

「分かった分かった、来てもいいよ！好きにしたらいいよ、もう！」

二人の前でこれ以上話していると、どうにかなりそうだった。

「その口ぶりだと、まだ何も分かってませんね!? それではいけません!・・・ふふふ、私いいことを思いついちゃいました!十日後に、出立してもらいます。それまでの間に二人の愛が結びつくよう、どうでしょう!?十日間、同じ部屋で寝食を共にしてもらおうというのは?」

「は?激、お前何言って

」

「素晴らしい考えです張魯さん!これからは秀とお呼び下さい!」

「私の真名は激と言います!一緒に愛の素晴らしさを聖さんに説きましよう!」

「ええ!」

お前ら、それでいいのか?

真名は軽々しく渡すようなものじゃないと教わったんだが・・・

「では、すぐに部屋を用意しましょう!今すぐに!」

「・・・って、お前ら?何勝手に決め付けて

」

「ええ、それがいいです!私達の愛のために!」

「愛のために!」

かくして、十日間の同居が始まったのだった、まる。

「閻圃さんに二人きりで五斗米道の良さを説き続けてもらおうと思っ
つていましたが・・・まあいいです、秀さんを先にこちらに引き込
んで二人で説き続けければ・・・長旅で疲れた心に五斗米道が沁み込
んでいくことでしょう・・・ふふふ・・・五斗米道に聖さん
が入信すれば、戦力に不安もなくなり、漢中以外に手を広げること
も・・・ああ、素晴らしい！待ち遠しいですね・・・私の・・・い
え、五斗米道の輝かしい未来が！」

「な、なな、ななななな・・・」
「?・・・どうしたんですか、聖さん」

寝台の中に入ってこようとした秀の姿を見て、顔が赤くなるのを
感じる。

そりゃまあ、秀が魅力的だとは思っし、一緒に寝るとなるとそっ
なってしまうと思う。

・・・そっじゃなくて。

「なんで、お前は裸なんだよ！」

そう、裸。

全裸である。

所々に傷が見られるけど、それが余計に艶めかしくて。

着痩せする体なのか、思ったよりもしっかりとある胸。

巨乳と言うほどではないけど弾力のある胸が、会ってから殆ど押しつけられていた訳で。

いや、上だけじゃない。

全裸だから、下の方だって

「寝るときには裸で寝るようにと、母から聞いたんです。まさか母の教えに背けなんて、言わないですよね？」

そんな教え、ある訳がない。

ない、けど

「・・・好きにしろ」

そう答えるしかなかった。

「あの、聖さん？」

「・・・なに？何か話すことでも

「私はあなたを愛しています」

指が、背中をなぞる。

「あなたが受け取ってくれるかどうかは関係ありません。私が愛している……ただ、それだけです」

胸を、押しつけられる。

「あなたが受け取らない理由は、私は聞きません。そんなこと、私にとっては意味の無いことです」

腕を、まわされる。

「無理やりにも、振り向かせます。私の価値を、あなたの中に創ります」

首筋に息を吹きかけられる。

「私の価値は、そこにしか出来ないのでから。私の愛を、与え続けます」

でも。

「否が応でも、感じさせます。私の愛の、ぬくもりを」

欲情は、しなかった。

「私の、愛に懸けて」

じくはく！（後書き）

黒くないと、一国の王なんてやってられないと思うんです。

おれは帝王！きさまらとはすべてがちがう！！

神はこのおれに沢山の評価までも与えたのだ！！

えんせい！（前書き）

怒濤の連日、始まるよ！

チャリーン

えんせい！

耐えた。

俺は耐えたのだ。

あの地獄のような十日間を。

嗚呼、大変だった。

毎日毎日起きたら秀の胸を一番に見るのだ。

背を向けて寝てたはずなのに俺の顔が胸に収まっているのだ。

熱い吐息が、耳に吹きかけられるのだ。

その・・・何とも言えない声を聞かされるのだ。

もう、どうにかなりそうだった。

どうにかなつてしまつたら、私の愛に答えてくれたとかいう詭弁に付き合わされるはめになるから、なんとか踏みとどまつた。

そう、耐えたんだ！

悲しいかな、地獄を耐えて得れたものは。

ほんの少しの達成感と、沢山の疲労感。

あ、後は秀から寄せられる恨みがましい視線だけ。

この十日の役割は確か、疲れを癒して万全の態勢で臨めるようにとかだったはずなんだが・・・肉体の疲労が、精神の疲労に変わっただけなんじゃないだろうか。

「聖さん？聖さん？」

拒絶され続けるのがこたえたのか、聖さんとしか言わなくなった。怖い。

なんというか、目を合わせるのも躊躇うような雰囲気。目を合わせたら俺は殺されてしまっんじゃなかつか。初めて死を身近に感じた気がする。

「それで？閻魔とかいう奴はまだ来ないのか？」

「いえ、もうそろそろ来るはずですけど」

「・・・ハア。おい激、まだなのか？」

「おかしいですね・・・アレ？」

「おいおい・・・もう一刻も待つてるぞ？どうなってんだよ・・・」

見送りに来てくれたのか、あの巨乳のお姉さんの方が来たじゃないか。

短く整えられた激とよく似た淡い色の髪は、蒼の髪飾りとよく合っている。

可愛らしいひらひらの服を揺らし、その凜とした顔がこっちを見てはにかんだ。

雰囲気と服が少しずれているのかちぐはぐな印象を受ける。

そして何より、揉みごたえのありそうな豊満な胸。

俺より少し小さいくらい背なのに、この胸の違いは一体何なのか。

可愛らしく体を揺らしながら近づいてくるお姉さん。

体が揺れるということは、もちろん“あれ”も揺れる訳で。

何がどうなるということはないけど、前世の名残か少し前屈みになってしまう。

「まったく・・・いつになったら来るんだよ！お姉さんの方が早く

「すみません、すみません！遅れちゃいましたー！」
「・・・え？」

「閻圃さん、どうして遅れたんですか？」

「いやあ、寝過ごしちゃいましたー！」

「照れることでもなんでもありません！どうしてあなたはいつもいっつも・・・」

「あはは・・・まあ、落ち着いて下さいよ、激様。ね？今日始まったことでもないですし・・・ね？」

「ね？ではありません！何を開き直っているのですか！そんなことでは・・・」

「まあまあ。ほら、人を待たせている訳ですし・・・ね？」

「誰を待っていたかと思っっているんですかあなたは！」

「・・・え？何この状況」

受付のお姉さんを大声で叱りつける激。

そんな怒鳴りをどこ吹く風と笑って流すお姉さん。

そして、相変わらず虚空を見つめて俺の真名を呟き続ける秀。

嗚呼、俺は一体どうすればいいのか。

「ほら、私のことを二人は分からないんですし。ここで怒鳴っていても仕方がないですよ？」

「ま、まあ・・・確かに・・・」

「ね？えっと・・・私は閻圃です。女の子が好きです！愛していると言っても過言ではありません！」

「こら、閻圃さん！あなた何を言っているんですか！」

「まあまあ落ち着いて・・・これからよろしくお願いしますね！丁原さんに高順さん！」

「お、おう！？アレ？」

「どうしましたか丁原さん？あ、もしかして私に惚れちゃいました

「？」

「いや・・・アレ？受付のお姉さんですよ？」

「受付？・・・ああ、あれですね。あれは暇だったから手伝ってあげただけですよ」

「ああ、そうなの・・・」

そんなに軽い仕事なのか。

というか、あときはとても礼儀正しいお姉さんだったんだが・・・とてもじゃないが、同一人物には見えない。

「・・・本当に受付のお姉さん？」

「そうだと言ってるじゃないですかー！信じて下さいよー！」

「いや、でも・・・もつと礼儀正しかったというか・・・」

「だって一応仕事ですから！私だって公私の区別ぐらい付きますよー！」

「仕事に遅れる人が何を言っているんですか！」

「あはは・・・深呼吸した方がいいですよ？落ち着きますから！」

「あなたのせいで・・・！」

「まあまあ・・・ほら、吸ってー吐いてー、吸って吐いてー」

「すう・・・はあ・・・すう・・・はあ・・・」

「吸ってー吸ってー、吸ってー吸ってー」

「すう・・・すう・・・すう・・・う！ゲホゲホ！」

「あはは！本当にやりましたよ丁原さん！面白いですね師君様は！」

「はあ・・・はあ・・・閻圃さん、あなたは・・・！」

「まあまあ・・・ほら、吸ってー吐いてー」

「何回やらせるつもりですか！閻圃さん、あなたという人は・・・！」

「やらせるだなんて・・・師君様、卑猥です！」

「あなたねえ・・・！」

「・・・何なんだ、アンタ」

「だから私は、閻圍ですよー！」

この漫才は、一体いつ終わるのだろうか。
見ているだけで胃が痛くなってくる。
これを毎日のようにやっているのかと思つと、激の胃を尊敬しそ
うになる。

ふと、閻圍の服が目に入る。

莫迦みたいにひらひらの青色の服。

武器を振るうのに確実に邪魔になると思つんだが・・・

「・・・そんな服で戦えるのか？」

「大丈夫です、問題ありません！」

「ああ、そうなの」

「だって私、戦いませんから！」

「ああ、そうなの・・・え？」

今、何て言つた？

「・・・戦わないの？」

「?どうして戦うんですか？」

「いや・・・遠征に行くんだよね?涼州に救援に行くんだよね?」

「はい、そうですよ！」

「・・・戦わないの？」

「?どうして戦うんですか？」

「絶対戦うでしょ！」

「私は戦いませんよ？」

「何で!？」

「私は涼州に観光に行くんです！」

「・・・仕事じゃなくて？」

「・・・仕事と観光に行くんです！」

「戦うよね？」

「戦う訳ないじゃないですか！だって・・・」

ピンと張りつめられた空気。

息をするのも憚られるような緊張感。

思わず、ゴクリと喉を鳴らす。

そして

「だって、服が汚れてしまっじゃないですか！」

「・・・へ？」

緊張感は、一瞬にして霧散した。

「分かりませんか、この服の価値が！？これは最新の阿蘇阿蘇に特集が組まれたもので、これを着ている・・・ただそれだけで崇められてもおかしくはないものなんです！気品溢れる姿の中に、可愛さが同居している・・・この全ての若者が思わず手を伸ばしてしまうような

「おい、秀行くぞ」

「聖さん？聖さん？」

「いい加減正気に戻れ莫迦」

「ひじ・・・聖さん！？嗚呼、私の手を取って・・・！ついに私の思いに答えてくれたんですね！」

「早く行くぞ莫迦」

「はい！嗚呼・・・幸せとはこのことを言うのでしょうか・・・！

「！」
「あ、ちょっと！待って下さいよ！一人とも！一応私も仕事なんです
からー！ちょっとー！」

「……………彼女に任せたのは失敗だったのでしょうか……………」
「……………」

「……………これは凄い……………」
「でしょ！？どうですかこの天幕は！私が丹精込めて作り上げた入
魂の一作ですよ！」

「……………アンタ凄いんだな」
「むむむ！？私を一体何だと思っていたんですか！」
「ただの莫迦」

「ひっどーい！こんな乙女を莫迦呼ばわりですか！天幕に入れさせ
てあげませんよ？」

「・・・悪かったって」

「仕方ないですね・・・私と接吻をしてくれたら

「秀、入るぞ」

「はい、聖さん！」

「ちよつと！？無視は酷くないですか！？」

「黙れ莫迦」

「すみませんすみません、機嫌直して下さいよ！」

流石に今日は脱がないのか、服を着たままで秀が腕を絡めてきた。十日間の裸の誘惑に耐えきった俺なら、これぐらいは大丈夫だ。だけど、隣の莫迦の視線が恐ろしくて仕方がない。

「おお、アツアツですねー！うふふ・・・どれ、私も・・・」

「おい、お前来るな！外で見張りでもしとけ！」

「何ですか？人の気配も感じないほど爆睡するんですか？」

「そうじゃないけど・・・」

「ならいいじゃないですか！私、言いましたよね？女の子が大好きなんです！特に、丁原さんのような胸の無い女の子が！」

「おい、莫迦！やめ

時既にお寿司。

両腕に感じる、確かな感触。

両耳に感じる、惱ましい吐息。

何も答えてくれない、黄色の天井。

もう逃避するしか、俺には残されていなかった。

嗚呼、お寿司が食べたい。

えんせい！（後書き）

結局何が言いたかったのか。

最近寿司食べてないなあ（おい

違っんだ！キャラが勝手に・・・

ばくはつ！（前書き）

作者は原作未プレイです。

作者は原作未プレイです。

大事なことなので何度でも言います。

チャリーン

ばくはっ！

「よく涼州へ来てくれた！私は馬騰だ。涼州はあなた達を歓迎するよ！」

涼州に着くと、御胸様が迎えに来てくれた。

そう、御胸様である。

そう、御胸様なのだ。

鬱陶しいと思われようが、何度だって言っつてやろうじゃないか。大きい。

巨乳だとか爆乳だとかそんなチャチなものでは断じてない。

そう、大きい。

俺の持つ語彙ではしつかりと語れないのが残念だが、これを見ることが出来ている私はとても幸運な存在なんじゃないだろうか。

「あたしはハウ徳、字は令明！よろしく！」

何とも姉御肌な雰囲気の女。

迎えに来た中で一人だけ浅葱色の髪をしていた。

「私は馬超、字は孟起っていうんだ！」

「ほら、蒲公英も！」

「おば様、たんぼぼも自分で言えるもん！たんぼぼは馬岱っていうんだよ！」

可愛い。

馬騰の家族らしいその二人は、馬騰と同じ茶色の髪を纏めていた。可愛い、が・・・まあ、馬騰があれなんだ。

将来凄いことになるのもあり得る。

これからに期待することにしよう。

母さんも胸が大きかったから、俺もまだ大丈夫・・・なはずだ。

「高順です。よろしくお願いします」

「俺は、丁原だ。よろしく・・・おい」

「・・・あ、はい？」

「閻圃、お前も言えよ」

「私はいいですよ、もう知ってますから。ねっ！」

楽しそうな顔になる馬岱とは対照的に、嫌そうな顔をする馬超。

・・・こいつ、何やったんだ？

「まあ、ゆつくり休んでくれ。出立は明日だ。その腕に懸かっているんだ、頼んだぞ！」

「分かった。期待に添えられるように、頑張るよ」

ここに来たのは、三人だけ。

それは、俺の活躍に期待してのことだろう。

期待されるのは、嫌いじゃない。

「久しぶり、ばっちゃん！」

「ば、ばっ・・・！」

「もう、可愛いなあばっちゃんは！」

「か、かわ・・・！わ、私のどこが可愛いつていうんだよ!？」

「えっと・・・全部?・・・ねえ、接吻していい？」

「な、な、なな・・・!？」

「姉様、顔真っ赤ー！」

「かーわーいーいーっ!！」

・・・ホント、何しに来たんだアイツ。

寝台で一人、上を見る。

一面を青に染められた天井は、さながら空のよう。

青以外に何も無いそれは、空よりも綺麗で、何よりも虚しく見える。

寝台で一人、夢を見る。

愛に満ち溢れた、過去のこと。

過去であり、夢である。

毎日のように見ていた夢。

見飽きてしまったのか分からないけど。

もう、涙は出なくなった。

「失礼します」

入って来たのは、秀だった。

いつものようにはしゃがないのを不思議に思いながら、体を起こす。

「どうした？」

「いえ・・・ただ、悲しそうだなと・・・」

悲しい？

「どうして、悲しいと思ったんだ？」

「だって、泣いてるじゃないですか」

俺が、泣いてる？

「何で俺が泣いてるんだよ。俺、涙なんて・・・」

「泣いています。私には分かります」

勝手な解釈をされて、怒りを覚える。

・・・耐える。

「お前に・・・何が分かるんだよ」

「分かりますよ、あなたのこと」

声が震える。

・・・耐える。

「分からねえよ。お前には」

「分かるんです。私には」

思わず齒軋りをしてしまう。

・・・耐える。

「何が分かるんだよ。お前なんか」

「分かりますよ。どうして泣いているのか、話してはくれませんか」

「？」

・・・耐え

俺を心配したのか、覗き込むように俺を見る。
その姿が夢の“あの人”と重なって

感情が、爆発した。

「お前に、お前に俺の何が分かるっていうんだ！お前は俺の何を
見ているんだ！」

静寂。

時が止まったのかと錯覚する。

俺の感情が、時を止めたのかと理解する。

暫くして、この女が口を開こうとするのが見えた。

それを遮るように、声を振り絞る。

「もしお前が本当に俺を愛しているなら・・・早くここから出て行
ってくれ・・・」

女は何か言いたそうにしていたが、そのまま背を向けてゆっくりと去っていった。

寝台で一人、上を見る。

一面を青に染められた天井は、さながら空のよう。

青以外に何も無いそれは、空よりも綺麗で、何よりも虚しく見える。

寝台で一人、目を瞑る。

一人で寝るのは、久しぶりな気がした。

慣れた筈の胸の痛みが、ひどく怖く思えてしまう。

慣れた筈のその孤独は、ひどく虚しく感じてしまう。

少し前に、戻っただけ。

なのに、中々寝付けなかった。

ばくはっ！(後書き)

口調わからんのや・・・

許して(笑)

あ、すいません、叩かないでください！

ホウ徳の当て字でいいのはないのか・・・

短いけど区切るんですよ

くちびる！（前書き）

唸れ、俺の右腕よ！

厨二の限りを書き記せ！

チャリーン

くちびる！

「お前達の腕に懸かっているんだ！頑張ってくれよ！」

馬騰の話によると、軍を三つに分けて一つの部隊を羌族に当てて引きずり出し、そこを横から挟み撃ちにするらしい。

そんな単純な動きでいいのかと聞いたところ、義勇軍も多く混じっていて高度な動きは出来ないんだそうだ。

それに、羌族は略奪が上手くいって調子に乗っていると。

中央の陽動部隊は俺と秀、左翼が馬騰と馬岱、右翼が马超と閻圃、ホウ徳という布陣。

言い方は悪いが、居なくなっても構わない俺と秀を陽動に置くのは当たり前か。

まあ、期待に答えるでしょう。

「……ひ、聖さん」

「……何か用か？“高順”」

「……！」

「どうした？」

「い、いえ……その、兵達を鼓舞したりは？」

「必要ないだろ。士気だけは莫迦高いんだ。空回るかどうか心配

だよ」

「そうですか……」

「羌族が見えてきたじゃないか。ほら、行くぞ“高順”」

「……はい」

直剣をかわし、足の腱を引き裂く。

突きだされた槍を蹴り上げ、その腕を切り裂く。

久しぶりの、昂揚感。

前世の影響が抜けきらないのか、人を殺すことに悦びを感じていてもただ意味もなく殺すのは気が引ける。

そんな俺にとって、大義名分のある戦というものは、それだけで甘美なことだった。

切る、裂く、潰す。

自己陶醉。

人を殺す度に湧きあがる悦び。

何故か今日はそれとは別の、謎の感情に震えていた。

今この場所に居る俺を俯瞰しているような不思議な感覚。

この瞬間、手で敵を貫いた俺を上から見るような。

例えるなら、本の中の主人公を見守る読者のよう。

主人公の活躍に一喜一憂する読者。

その感情は、必ずしも主人公と同じという訳ではなく。

まるで、二重人格に成ってしまったかのような。

今貫いたはずのこの手には、何の感覚もなかった。

意味のないくだらないことを考えているうちに、合図の銅鑼が鳴り響いた。

反転して、打ってでる。

挟撃によって瓦解していく羌族。

それでもなお、立ち向かってくる者達。

仲間が今逃げ出しているというのに、臆することなく立ち向かうのは、誇りか、自信か、それとも

剣を捌き隙だらけの体を蹴り上げる。

脚の通り道を黄色の閃光が走る。

そして、朱が舞った。

脆く崩れ落ちる体。

俺はそれを一瞥すると、前へ

足を、何かが掴んだ。

崩れ落ちた筈の男が、俺の顔を見上げた。

紅い涙で濡れたその顔は、父さんによく似ていた。

「俺は、お前を犯したい」

あのとときと何一つ変わらない声が頭に響く。

あのとときから何一つ変わらない痛みが胸を叩く。

あのとときと何一つ変わらない俺の心は。

あのとときから止まっているのだろう。

決して傷を癒すことなく、時間は過ぎ去っていく。

俯瞰感覚。

それは、理解したくないだけで。

二重人格。

それは、心を止めているだけで。

自己陶醉。

それは、目を背けているだけで。

謎の感情。

それは。

生きているという実感が湧かない。

・・・違う。

生きる理由を見出せない。

・・・違う。

もっと単純なこと。

俺は。

俺は、ただ

死にたい。

その場で、へたり込む。

力が、入らない。

血だらけになりながらも、足を掴み這い上がってくる男への恐怖
じゃない。

ようやく死ぬことが出来るのだという安堵から、無意識に力を抜
く。

男が、俺の胸倉を掴む。

血塗れの男の顔は、それでも死んでいなかった。

今にも死にそうな、生きたい男。

傷一つない、死にたい女。

死ねる。

ようやく。

何も理解できない毎日から、解放される。

男は、俺の首に手を掛けて

男の顔が、蹴り上げられた。

体が崩れる音が聞こえ、視界から男の姿が消えた。
顔を上げる。

そこには、見慣れた女が立っていた。

艶のある、紅の髪。

派手な装飾はないけど、一目見て上質なものとわかる、黒を基調にした軽甲。

手に持つ槍には、赤い螺旋が描かれている。

力強い雰囲気を漂わせる、格好いいその風貌。

理由は分からないけど、その女から目が離せない。

女の背中に、光が差し込む。

男の頭を踏みぬいたその姿は、とんでもないほど残酷で、
どうしようもないほど、美しかった。

そう、例えるなら

「ふう、疲れたな！」

「ええ、疲れましたねー！」

「闇圃は何もやってないじゃないか……」

「また啼かせて欲しいの？ば・ちょ・う・ちゃん？」

「お、お前な……！」

「なになに？たんぽぽにも教えて？」

「実は、ばつちよんつたらね？……」

「な、何を勝手に言ってるんだ！？やめろー！」

「いやあ、二人のおかげで助かったよ！正直あまり期待はしていな
かったんだが、二人が頑張ってくれたおかげで少ない犠牲で追い払
うことが出来た！ほら、呑みなよ！」

「……いや、いいよ」

「?どうしてだい？」

「ちょっと、横になりたくてさ」

「そうかい・・・ゆっくりしなよ」

「ああ・・・」

「お前は、どうする?」

「・・・」

「はあ・・・よく分からんが、行くなら早めに行った方がいいぞ」
「・・・はい」

「何ともまあ・・・面倒な奴らだ。抱える必要なんてないっていうのに・・・これじゃあ酒が不味くなるじゃないか」

「馬騰さん!」

「お、閨圍か。どうした?向こうは暇か?」

「いえ、たっぷり遊んだので馬騰さんの酌をしようと思ひまして」

「はは・・・あんまり翠を苛めないでやってくれ」

「それは、要検討ということだ」

「おいおい・・・ほら、呑みなよ」

「むむ・・・いいんですか?」

「私の酒が呑めないのか?」

「私が酌をする予定だったので・・・では、ありがたく」

「おう。・・・お前はあいつらのこと、どう思う?」

「ありがとうございます。・・・あいつらとは?」

「あの二人だよ」

「私は人の恋路を邪魔するほど無粋じゃないですよ」

「お前なあ・・・」

「部外者が口を出して解決するようには見えませんし・・・面倒事に首を突っ込む趣味はないので」

「どの口が言うんだか。まあ、案外明日には元気になってるかも知れないな」

「ですね。・・・乾杯します?」

「そうだな。じゃあ・・・勝利と愛に」

「馬超ちゃんの赤ら顔に」

「お前らしいな。まあいいや」

「「乾杯」」

寝台で一人、上を見る。

一面を青に染められた天井は、さながら空のよう。からっぽの空を見て、俺は何を思うのか。

「失礼します」

入って来たのは、秀だった。

気まずい雰囲気の流れる。

流れ続けて消えてはくれないのか。

「・・・あの!」

抵抗しなかったことを問い詰められるのか。
無視したことを問い詰められるのか。
それとも……

「昨日は、すみませんでした！」

「……へ？」

「あなたが受け取らない理由は聞かないと言っていたのに、話してくるようには迫ってしまって……」

そんなこと？

そんなことを謝るために態々来たのか？

「……別にいいよ、そんなこと」

「本当ですか？死のうとしたのは私のせいですよね？」

急に体が重くなった、気がした。

「……いや、違うよ。俺が死にたかったからそうした」

「嘘です」

「何だよ、嘘って」

「死にたい訳がないです」

「俺がそうだと言ってるのにか？」

「……本当に死にたいんですか？」

「ああ」

「そうですね」

「なら、私が殺します」

不意に、体を押し倒された。

首筋に短剣を当てられる。

俺に跨る秀。

図らずも“あの時”と同じ状況になってしまったのを喜ぶべきか。
まあ、死ぬることを悦ぼう。

振り上げられた短剣は。

俺のナニカを切り裂いた。

短剣が耳元に突き刺さる。

決して俺を傷つけることなく、寝台に突き立てた秀は。

「これで、丁原は私に殺されました」

そんなことを宣った。

「お前、一体何を言ってるんだ」

「丁原は私に殺されたと言ったんです」

「何を莫迦なことを。俺は生きてるじゃないか」

「ええ、生きていますね」

「お前、莫迦だろ」

「私にはあなたを死なせることは出来ません」

「だから殺したと？」
「はい」

それは、屁理屈で。

「だって聖さん、泣いてるじゃないですか」
「俺が、泣いてる？」
「ええ、泣いてます」
「嘔吐くなよ」
「涙、出ってますよ」
「え？」

頬が冷たい。

知らない間に濡れてたみたいだ。

「泣いてねえよ」
「泣いてます」
「俺が泣いてねえって言ったら泣いてねえんだ」
「それ、屁理屈ですよ」

楽しそうに笑う。

その笑顔を見ていると、何故か自分が小さく見えた。

「・・・なあ、秀」
「何ですか？」
「俺のどこが好きなんだよ。俺、そんなにいい奴じゃないぞ？」
「違いますよ、聖さん」
「ん？」

「愛するのに理由なんて必要ないんです。聖さんも、分かっている
でしょっ？」

確かに。
言われてみればそうかもしれない。

「でも、俺はお前の愛を拒絶して
振り向かせればいいだけです。諦めません」

なんて、強い心なのか。
なんて、真っ直ぐな心なのか。

「でも、俺は愛を信じられない」

俺の愛した母さんは、俺のせいで死んだ。
俺の愛した父さんは、俺のせいで狂った。
俺の愛のせいで。

「愛は、哀しみしか生まない」

「本当にそうですか？」

「え？」

「私は今、あなたを愛しています。今、私は幸せです」
「そんなの」

「おかしいですか？愛で幸せになれるんです」

それでも。

「俺は愛を求めてない」

「嘘です」

「俺がそうだと言っているのに？」

「ええ。あなたは愛を求める。絶対に」

「絶対って……」

吼える。

「お前に、お前に俺の何が分かるっていうんだ！お前は俺の何を見ているんだ！」

昨日と一字一句違わぬ言葉。

答えは、すぐに帰って来た。

「そこに理由は必要ですか？私はあなたしか見ていません。私はあなたしか要りません。だから、確信します。あなたには愛が必要だ。理屈ではなく、感情で。私は、あなたと生きたい」

正しく狂言。

定まらない言葉の波。

理解する前に、“理解”した。
理屈ではなく、感情で。

「私はあなたを愛しています」

抱きしめられる。

「あなたが受け取ってくれるかどうかは関係ありません。私が愛している・・・ただ、それだけです。あなたが受け取らない理由は、私は聞きません。そんなこと、私にとっては意味の無いことです」

腕を、まわされる。

「無理やりにも、振り向かせます。私の価値を、あなたの中に創ります。私の価値は、そこにしか出来ないので。私の愛を、与

え続けます」

胸を埋める甘い匂い。

「否が応でも、感じさせます。私の愛の、ぬくもりを。私の、愛に懸けて」

哀しい思いは、今はなかった。

「私の愛、感じましたか？」

愛ゆえに人は苦しまねばならぬ。

愛ゆえに人は悲しまねばならぬ。

嗚呼、それは紛れもない真実。

でも。

もう一度だけ、その愛とやらを。

信じて、いいんじゃないか。

「また死にたくなるかもしれないぞ？」

かすれる声で、呟く。

「そのときは私がまた殺します。何度でも」

答えは、在った。

「裏切ったら、殺すからな」

震える声で、呟く。

「裏切りませんよ、死なない限り」

答えは、在った。

「・・・聖さん」

顔を上げる。

・・・なんだ、お前も泣いてるじゃないか。

「もしあなたに私の愛が伝わったのなら・・・」

それだけ言って、目を閉じる。

答えは、在った。

三人目の唇は、少ししよっぱい味がした。

くちびる！（後書き）

ここまで愛してくれる人に会いたい。

まあ、居る訳ないんですけどね！

おめやす！（前書き）

サブタイトルの書き方をもう既に後悔してるorz

少女（！？）両替中・・・

おめやす！

アンケートを取りたいんだ！

問一、主人公陣営について

貧 原作キャラも入って構わん！

乳 原作キャラは原作陣営に決まっとる！オリキャラだけに
しとき！

問二、北郷一刀について

ひ もちろん居ないと始まらない！

じ 種馬には死を！というか来るな！

り おいおい、マジかよ・・・こいつ女だったのか・・・

問三、もし種馬が来たら・・・

て 魏に決まってるやる！

い いやいや、呉でしょ！

お 蜀じゃないと許せない！

う まさかの丁原ルート！？

あと、オリキャラ募集は永遠に続いております。

おめやす！（後書き）

アンケートにご協力お願いします。

この十字陵は偉大なる師オウガイへの最後の心！！
そして このおれの感想と評価の墓でもあるのだ！！

けいかく！（前書き）

2Bをジャンプキャンセル出来るシンが居たらキャララ替えます！

けいかく！

何かに包まれるようなぬくもりに目を覚ます。

目に飛び込むのは昨日の朝と変わらない青。

腰を温めるのは、秀の腕。

たった一日で何か変わるとは思えないけど。

きっかけは、あつた気がした。

声を掛ける。

ただそれだけのことが、何故か嬉しかった。

愛の苦しみは、まだ胸に。

愛の喜びも、今胸に。

おはよう。

当然のように腕を絡めてくる秀。

当然のようにそれを受け入れる俺。

当然のように倒れそうな闇圃。

「まあ、何ともお熱いことで・・・」

いつもならニコニコしながら煽ってくるのに、元気の欠片もない声がかるとはかなり危ないんじゃないか。

「・・・お前、大丈夫か？顔色悪いぞ」

「ちよつと、呑みすぎちゃいまして・・・」

「・・・ちよつとには見えないんだが」

「馬騰さんが強すぎるのが悪いんです・・・頭痛が痛い・・・」

莫迦なことを言う閻圃。

頭痛が痛いとか、本格的に手遅れな気がする。

「閻圃さん臭いですよ」

「酒臭いなお前」

「こんな可愛い乙女に臭いだなんて・・・どういつつも・・・おえっ」

「吐くなよ！？吐くなよ！？」

「大丈夫です・・・乙女ですから！」

それは、とてもイイ笑顔だった。

「おい、何で俺にもたれ掛かるんだ！やめっ！ちよつと秀、離れるなよ！愛しているとか言っただろ！？」

「これも愛ですよ」

「そんな愛があるか！ちよつと！」

「ありがとな！激にもよろしく言っといてくれ！」
「分かったよ、馬騰」

酔い潰れた影響で恐ろしいことになっている閻圃とは対照的にとても元気そうだ。

とても子を産んでいるとは思えないほどに。

抱き合う。

やましいことはないのに、焦ってしまう。

抱き合うということは、アレと真正面に対峙することでもある。

つまり、潰れるのだ。

アレが。

胸に当たる確かな感触。

あまりにも甘美なその誘惑は、世の男どもを虜にする。

触れた瞬間の絶頂に勝るとも劣らないその快感は、まるで世界全てを凝縮したような

「・・・あっ」

「何を名残惜しそうな顔をしてるんだお前は」

「い、いや・・・別に・・・」

「触りたいか？」

「・・・えっ!?!」

「嘘に決まってるだろう」

「えっ・・・」

「・・・可愛いなお前」

弄ばれる。

だがしかし、御胸様に弄ばれるならそれはそれで・・・！
腕を組む力が強まる。

ギギギと横を見ると、素晴らしい頬笑みを携えた天使がそこに。

「・・・聖さん！」

頭を力任せに引き寄せられる。

目に映るのは据わった眼。

思いつきり腕を振りかぶり

「んう！？」

「・・・んあ・・・ぷはっ」

俺の首にまわしてきた。

唇に柔らかな感触。

頭の処理が落ち着かない。

「あ・・・え・・・？」

「ご馳走様でした」

秀の言葉が耳に入り、ようやく何をされたか理解した。
理解したけど、よく分からない。

「てつきり殴られるのかと思ったんだけど・・・」

「そんな訳ないじゃないですか」

失礼ですねと頬を膨らませる秀。

「暴力は愛じゃないですよ。嫉妬はしましたが、聖さんを殴るなんてことはあり得ません。他の人の方に向いたのなら、また振り向かせるだけです。私は聖さんを愛していますから」

「そ、そうか？」

顔が赤くなるのが分かる。

確かに昨日秀からの愛を受け入れたが、こっ面と向かって口にされるにむず痒い。

もう一度と急かすように、秀が目を瞑る。

それを見て、俺もその唇に

「そういうことは他所でやってくれないか？」

「ひゃあっ！」

唐突に声を掛けられて、俺のものが疑わしい声を上げる。

いや、唐突にというか初めから見えていた訳だけでも。

見られていたというのを意識してまた赤くなる。

多分、林檎に負けない赤さじゃないだろうか。

赤いのは俺だけで秀の顔色はいつもと大差なかった。

赤い顔とは別の意味で恥ずかしい。

「どうして邪魔するんですか馬騰さん？」

「邪魔といわれてもなあ。見せられてるこっちの気持ちにもなってくれよ全く」

「幸せですか？」

「まあいけしゃあしゃあと・・・そんなこと、よく言えるな高順は」

角砂糖をそのまま齧ったような顔をする馬騰。

「甘いのは好きだけど、甘すぎるのは胸焼けしそうで遠慮したいね」

「そうですか。では他所でやってきますね」

「やらねえよ莫迦」

「もしかして、馬騰さんと話していたのに嫉妬してます？聖さんに嫉妬してもらえるなんて、幸せです！」

頬に手を当ててくねくねと動く。

秀だから絵的にマシなものの、これをムキムキの筋肉達磨がやったとしたら確実に死傷者が出ると思う。

「お前、やっぱり莫迦だろ」

「もう少し、居たかったですねー」

「何で？」

「馬超ちゃんが可愛いので！」

御胸様の子か。

可愛かったな、確かに。

将来にも期待が持てるという点もいい。

でも、馬超といえば・・・

「・・・お前、何やったんだ？二言ぐらいしか喋ってないのに急に助けてくれって言われたんだが」

いきなり俺の天幕に飛び込んできて助けてくれと言われたのだ。状況を全く掴めていない俺だったが、必死だったから匿ってやった。

それだけで凄く感謝されたのは強烈に覚えている。

「私のせいではありませんよー！それ、馬岱ちゃんの悪戯ですって！」

「お前、人のせいにするのは駄目だと思うぞ」

「本当に何割かは馬岱ちゃんが悪いんです！」

「何割かは？」

「ええ、何割かは！」

これはひどい。

馬超のためにも、早く出たのは正解だったか。

「私は聖さんと結ばれただけでもういいです！」

「結ばれてはねえよ。受け入れただけ」

「それでも大きな前進です！」

秀がぎゅっと抱きついてくる。

少し秀の方が大きいせいか少し後ろへふらつく。

その後ろに閻圃が居る訳で。

「おやあー？そんなに甘えたいんですか丁原さんは！ふふ、いいでしょう！私が抱擁してあげましょう！」

閻圃まで抱きついてきた。

俺の方が少し大きいとはいえ、その大きな胸に押されてしまう。
左に秀、右に閻圃。

俗に言う両手に花というやつなのだが果たして、これは幸せなん
だろうか。

からかうために押してくる閻圃に負けまいと、秀も一緒に押して
くる。

柔らかさとかそういったものを一切感じられずに、むしろ息苦し
くなっていく。

窒息死とか、洒落にならないぞこれ。

「あー！」

ふいに、閻圃が声を上げる。

「どうした、閻圃」

「丁原さん、五斗米道に入信しませんか！」

「いきなりだな・・・」

語尾が疑問ではなく断定だった気がしないでもないが、気にしな
いでおこう。

うん。

五斗米道に入信するということは激の下につくということだ、そ
れは非常に好ましくないことだが・・・

「いいよ、別に」

「ああ、やっぱりいいですか？はあ、そりゃいいに決まっていますよね。
・・・!?え!?!」

「入ってもいいって言ったんだよ俺は」

「本当ですか!?!」

「まあ、何だ。その愛とかいうヤツに助けられたみたいだし・・・
入ってやるぐらいは別に・・・」

途中で恥ずかしくなつて尻すぼみに消えていったけど、大事なところは聞こえた筈だ。

驚くのも無理はないと思う。

今まで勧誘され続けてずっと断つて来た訳だし、少し前の俺も吃驚してゐるだろう。

「だから入るよ、五斗米道」

「・・・した・・・」

「え？」

「来ました！遂に私の時代到来です！」

急に暴走し始めたんだが、大丈夫か？

「先に高順さんを入信させて、長旅で疲れたところを二人で勧誘を
すると見事に入ってくれる！いやー、師君様の計画を聞いたときは
そんなに上手いようにいく訳がないと思つていましたが、いやーこ
れは！現実には甘いものなんです！高順さんを入れる必要があつた
のかどうか！丁原さんの勧誘に成功ということで、お給金が倍近く
に！師君様、この話は嘘だなんて言わせませんよ！これで阿蘇阿蘇
の商品も買い漁れるように・・・ああ、素晴らしき我が人生！」

「・・・」

こいつ、今何を口走つた？

計画とか言つたんだが、気のせいじゃないよな？

秀と顔を見合わせる。

秀の顔も、情けないものだった。

何だ？

全ては激の手の平の上とでも言つつもりか？
答えが返ってくるはずもないけど、質問を口にする。

「今の話、本当か？激に踊らされたってこと？」
「そのとーりいっ！！」

答え、返ってきちゃった。

「丁寧に親指まで立ててみせてくれた。
色々とぐちゃぐちゃになって、言いたいことが沢山浮かんでくる。
とりあえず。」

こいつ、確実に莫迦だ。

けいかく！（後書き）

想像してごらん？

くねくねと踊る漢女達を。

・・・おえっ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5694z/>

せいていさんがんばって！

2012年1月2日07時46分発行